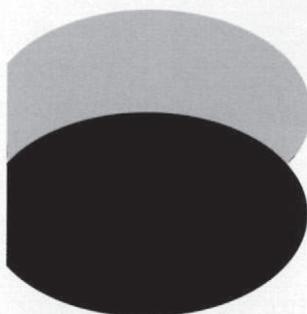


2013 11 18

絵本学会 NEWS No.49

発行：絵本学会
発行日：2013年11月18日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学児童学科 石井光恵研究室内
E-mail:ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp
<http://www.u-gakugei.ac.jp/ehon/index.html>



第16回絵本学会大会報告
講演 旅と絵本 スズキコージ
研究発表・作品発表
ラウンドテーブル
絵本学会第16回定期総会報告
各委員会から
事務局からのお知らせ
お知らせ—出版、絵本関連展覧会など

絵本学会

第16回絵本学会大会報告

え？ほん!?—あれも絵本 これも絵本—

大会実行委員長 鈴木善彦

大会実行委員 今井良朗 加藤祐治 小杉大輔 佐井国夫 佐藤博一 林左和子 林容子 松本なお子 宮内博美

絵本学会第16回大会は、6月15日(土)・16日(日)の2日間、静岡文化芸術大学を会場として開催されました。2000年に公設民営の私立大学として開学した静岡文化芸術大学は、2010年に静岡県立の公立大学へと移行、ユニバーサルデザインと多文化共生に取り組む開かれた大学です。JR浜松駅から徒歩15分の便利な立地にある都市型大学ですが、美しく整備されたキャンパスは静かで落ち着いた雰囲気があり、絵本学会大会の開催に申し分ない環境でした。

本大会では、前年の11月ようやく会場が決定されたこともあり、開催案内の告知が例年よりも遅れてしまいました。しかし、短い準備期間にもかかわらず、大会実行委員会事務局のご尽力と委員の皆さまのご協力により、会員121名、一般60名、学生25名、合計206名の参加者によって充実した2日間の大会を無事に終えることができました。

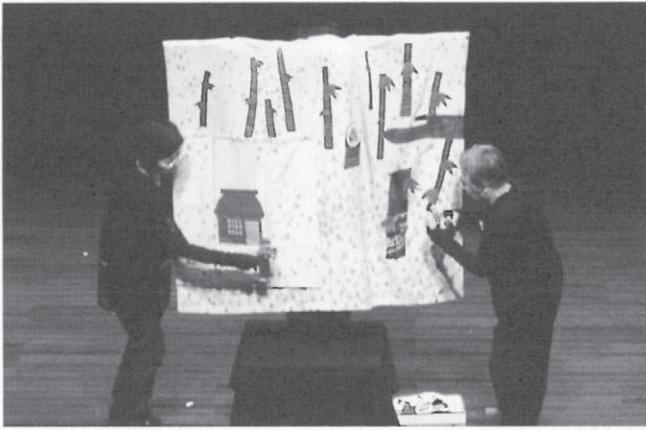
メイン会場となった大学講堂では、開会式と実演紹介、シンポジウム、講演会が行われ、講堂近くに位置する複数の教室が研究発表と分科会(ラウンドテーブル)の会場となりました。また、キャンパス西側の通りに面した大学ギャラリーが作品発表の会場となり、同ギャラリーで、静岡文化芸術大学が主催する公募「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2012」の入賞作品、さらに、大会テーマと関連して、筑波大学、武蔵野美術大学、京都造形芸術大学の学生作品も参考として展示されました。

本大会のメインテーマは1月の理事会で「え？ほん!?—あれも絵本 これも絵本—」に決まりました。もともと、第16回大会では、絵本の広がりや多様性にも注視しよう、という意見交換から「モノとしての絵本」がメインテーマとして予定されていました。しかし、

議論を重ねた結果、より簡明な驚きと印象強い言葉によって問題を提起できるように、「え？ほん!?」に続けて「あれも絵本 これも絵本」を補足的に付けることとなりました。開催案内の告知やプログラムなどの印刷物には、武田美穂理事がイラストレーションを添えることも同時に決定し、「モノとしての絵本」は「ユニバーサルデザイン絵本」とともに分科会(ラウンドテーブル)のテーマのひとつとして議論されることになりました。

大会第1日目の開会式では、鈴木善彦大会実行委員長(静岡文化芸術大学理事)より開会の辞が述べられ、松本猛会長より開催校への謝辞と学会の現状報告、さらに本大会のメインテーマ「え？ほん!?—あれも絵本 これも絵本—」を考察する際の視点について解説が加えられました。開会式の後は、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2010」で大賞を受賞した作品『着物シアター かぐや姫』をグループつくしんぼが紹介、続いて、元・浜松市立中央図書館長の松本なお子氏によるストーリーテリングが行われ、本大会のメインテーマが少しずつ参加者へ浸透していきました。

シンポジウムは、「共に生きる 絵本にできること」をテーマに企画されました。異なる立場にあるすべての人がそれぞれの違いを認め合い、尊重し合って共に生きる社会が実現されるために、絵本で何ができるか、という問題について、ユニバーサルデザイン、多文化共生、社会学、絵本制作、各専門分野の視点からの提言を受け、考える貴重な機会となりました。本大会の実行委員である林左和子氏(静岡文化芸術大学文化政策学部教授)の司会・進行のもと、摺上久子氏(世界のバリアフリー絵本展実行委員長)による「絵本が向ける眼差しは共に生きる社会のバロメーター」、古瀬敏氏(静岡文化



芸術大学デザイン学部教授)による「絵本とユニバーサルデザイン: 中身と伝え方」、池上重弘氏(静岡文化芸術大学文化政策学部教授)による「日系ブラジル人移住二世代が託すパトン、としてのユニバーサルデザイン絵本」、森俊太氏(静岡文化芸術大学文化政策学部教授)による「絵本と社会学: 大学授業における絵本利用の事例」、武田美穂氏(絵本作家)による「創作者の立場から」、と順次、短い割り当て時間の中で焦点の絞られた報告が、手話通訳も入ったうえで進められました。各報告の終了後は、報告者全員が登壇、会場からの質疑に答えるかたちで活発な意見交換が行われ、テーマに対する理解がより深まってきました。《シンポジウムの報告は次号の絵本学会ニュースに掲載される予定です》

本大会の研究発表には14件の応募があり、全件が採択され、2会場・2日間に分かれて進行されました。今回の研究発表においても、研究の視点が、教育実践、表現制作、絵本受容、作家・作品研究、児童文化、など、実に多岐に渡っており、絵本学という学問領域の多様性と拡張性をあらためて知る機会となりました。

第1日目夕刻の定期総会後は、場所をJR浜松駅前の遠鉄百貨店13階スカイテラスに移し、交流会が開催されました。夕刻から降り始めた雨のため、窓から富士山を眺望することは叶いませんでしたが、広々とした会場は参加者の笑顔で終始賑わい、懇親が深まるひとときが過ぎていきました。

●
第2日目は、作品制作者の口述による作品発表から始まりました。従来の大会では、研究発表と同様の形式で行われていた作品発表ですが、今回はギャラリーでの展示という状況を活用し、一定の時間内に展示作品の前で、発表者が参加者と自由にディスカッションを行う懇談会(ギャラリートーク)の形式が導入されました。作品発表には10件の応募があり、発表者一人あたり3メートル幅の壁面と展示台使用を基本に、会員作品展としての質的向上を目指しましたが、概ね、良い評価を得られたように思います。会場ごとの事情も考慮しなければなりません。絵本学会として作品をどう見せるかは、今後も大会運営の重要な課題であると考えられます。

作品発表の後、講堂では、絵本作家のスズキコージ氏による講演「旅と絵本」が行われました。スズキコージ氏が生まれ育った場所は現在の浜松市浜北にあたります。講演では、生い立ちと地元・浜松への愛着、自作誕生のエピ

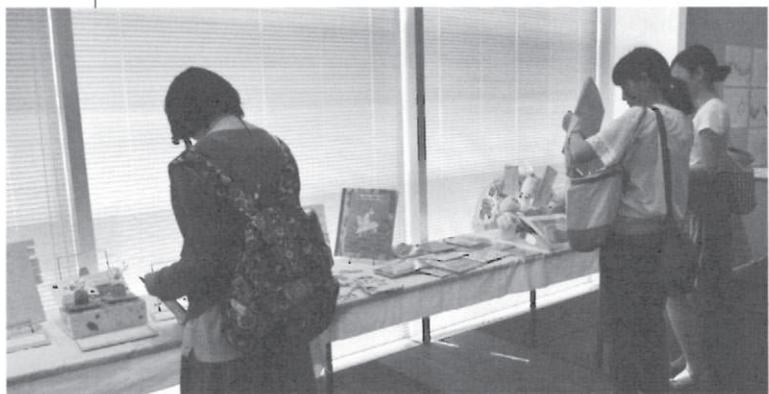
ソードや独自の絵本観など、これまでの歩みを振り返りつつ、興味深い話題が次々に登場し、2時間があっという間に過ぎていきました。普段、絵本作品をとおして交流するスズキコージ氏の息づかいを感じ、語りかけられる言葉に耳を傾け、作品が生まれ来る背景を知ることによって、作家の表現世界をより身近に感じることができました。

講演の後、研究発表(第2日目)が行われ、続いて大会最後のプログラムである分科会(ラウンドテーブル)が2会場で実施されました。第1会場では「ユニバーサルデザイン絵本」をテーマに、摺上久子氏と武田美穂氏が話題を提供し、林左和子氏がコーディネーターとなって、前日に行われたシンポジウムの議論をより深めるかたちで進行されました。第2会場は「モノとしての絵本」をテーマに、国内外で活躍するアーティストの藤本由紀夫氏、パッケージデザインを専門とする佐井国夫氏(静岡文化芸術大学デザイン学部教授)がそれぞれの専門分野を紹介し、参加者とともに会場全体でテーマを考えていくための視点を探求しました。(コーディネーターは佐藤博一が務めました。)

両会場のテーマ「ユニバーサルデザイン絵本」、「モノとしての絵本」はともに、本大会のメインテーマに深く関わる問題です。限られた時間の中で、十分な議論ができたとは言えませんが、今後もさまざまな機会でも議論が重ねられることに期待します。

今回の第16回大会は、広がる絵本の世界とその社会的役割について、メインテーマ「え?ほん!? —あれも絵本 これも絵本—」をとおして多方面から考える機会となりました。特に、会場となった静岡文化芸術大学の理念と大会テーマとが問題意識を共有し、多文化共生、社会学といったテーマから絵本について議論する貴重な場として大会開催意義を高めた点は、本大会の特徴であると言えます。絵本学会の理事会組織が新しくなり、松本会長のもと、以前より増して、作家との交流も推進されるとともに、学会設立の原点に立ち返って、今後取り組むべき問題の再認識が進められています。研究者、編集者、実作者が集う絵本学会という場であるからこそ、互いに刺激し合い、各発表における議論も深まります。次回、2014年の第17回大会は5月31日・6月1日に刈谷市総合文化センターで開催される予定ですが、より多くの参加者が活発に意見を交換し、交流を深める場となることを期待したいと思います。

なお、今回の大会開催にあたり、大会実行委員会は、委員長・鈴木善彦氏はじめ、静岡文化芸術大学の先生方、加藤裕治氏、小杉大輔氏、佐井国夫氏、林左和子氏、林容子氏、副学長の宮内博実氏、



また、松本なお子氏(元・浜松市立中央図書館長)のほか、理事会から今井良朗理事、佐藤博一が関わった体制で運営にあたりました。中でも、林左和子氏は、大会実行委員会事務局として多大な責務を担っていただいたほか、当日のプログラムにおいても随所で重要な役割を果たしていただきました。さらに印象的だったのは、学生スタッフの皆さんの貢献であり、準備から当日の受付、進行補助、後片付けまで本当に大活躍で、それぞれのプログラム運営に興味をもって取り組んでくれました。次代の研究者、制作者を育成する意味においても、学会本来の姿が示されたように思います。みなさん、本当にありがとうございました。(佐藤博一)



講演 旅と絵本 スズキコージ

(お面で登場)

こんにちは、スズキコージです。

僕は浜松市浜北区小松の出身で、高校のころは浜松西高校に通ってました。当時父が革のカバンを僕に譲ってくれて、それをさみで切ってお面を作ったりしてました。放課後はそのお面をかぶって浜松城あたりをひとりパレードのように練り歩いていた思い出があって、その名残もあってか、革のお面をかぶるという行為が非常に心地いいんです。

7、8年前に浜松市美術館で同じように講演と展覧会をしたんで



すが、浜松市美術館は古いですけど、とても会場が広くて、僕の絵本原画も高さが2メートルあるライブペインティングもびっちり入りましたし、浜松のたくさんの方が見に来てくれました。まさか自分が浜松でたくさんの方の前でこんな話をする事になるとは思いもよらなかったですけど。

しかし今年は絵本はさよならってくらい(大きな絵を描いたりはしてましたけど) 絵本の活動は何もしてなかった。

この前ラボ教育センターで『三匹の子豚』という絵本を東京に送ったんですけど、それが一番新作ですね。コラージュを駆使して制作したのですが、イングランドのジョセフ・ジェイコブスという童話作家の『三匹の子豚』です。

僕のコラージュはよく見るとロシア語が結構使われています。形のかっこよさから入っていくことが多いんですが、アエロフロート(ロシアの航空会社)やギリシャ語の意味は分からないけれど、形が面白くて好きで結構コラージュに取り入れています。

絵本を読んでも、これ何語だろう?と思うかもしれませんが、分かる人を見ると意味が分かっちゃってかなりへんてこなことが書いてあるみたいです。

『三匹の子豚』は有名な物語です。

三匹の子豚とお母さんがある村に住んでいました。その三匹は栄養失調でお母さんも美味しいもの食べさせてあげられないから「あんたたち旅にでなさい、そして自分たちで家を建てて暮らしていきなさい、さようなら」という、非常に厳しい状態から始まるわけです。

まず一匹目の子豚が歩いていくと、向こうから藁をかついだ男に出会う。おじさんその藁ちょうだい、おうちを作りたいからと。そこにオオカミがやってきて鼻息で藁の家をふわって吹き飛ばしちゃうわけです、しかも一匹目の子豚を食べちゃう。

そして二匹目の子豚はいつか旅に出るとハリエニシダという黄色い花が咲いている木を担いだ男に出会います。

それで家を作りたいからおじさんちょっと分けてよって頼む。それで家を作るけど、またオオカミがやってきて家は吹き飛ばされ、二匹目も食べられてしまう。

最後は三匹目の子豚が旅に出る。すると煉瓦職人の男に出会う。煉瓦を分けてもらった三匹目の子豚は、それでしっかりした家を建てる。そこへまたオオカミがやってくると、「立派な家だな、中へ入れてくれ」と頼む。今までのように鼻息では吹き飛ばすことができなかつたんですね。ところが三匹目の子豚は「僕の顎鬚ちんちんが嫌だっていうから嫌だ」という。この訳は誰がしたんだろうって思うけど、僕はこのフレーズがすごく気に入ってます。

家に入れてもらえなかつたオオカミは何とかして子豚を誘い出そうとするんですね。スミスさんのカブ畑で5時にカブをとって来ようと約束するんだけど、子豚は3時くらいに鍋いっぱいに取りてきてしまう。オオカミは驚いて「なんでそんなに持ってくるんだ？」と聞くと自分は先に行って取ってきたんだという。

今度は広場でバザーがやるからまた時間を決めて行くんですが、子豚は早く行ってしまつてバターを作る桶を買うわけです。

帰ろうとしたときに向こうからオオカミがやってくるのが見えて「あ、まずいのに会っちゃった！」子豚はオオカミに出会いたくないから、桶の中に隠れて坂を転がっていくわけです。

転がる桶にぶつかりそうになりながらオオカミはうひゃーっと逃げて行きます。後日バザーで桶がいきなり転がってきたんだと話すとき「あの中には僕がいたんだ」と子豚が白状すると、オオカミは

かんかんに怒ってついに子豚の家の煙突から入って食べようとしてます。しかし子豚は煙突の下のかまどに鍋を用意して、ぐつぐつ煮えたぎったお湯を張って待ちかかっているわけね。オオカミはドボンと煮えたぎった湯の中に落ちます。

印刷されたら是非見てほしいですがこの見開きの絵が凄まじい怖い絵になっちゃって、まあ迫力が出たなと思います。

そして三匹目の子豚は、オオカミをすべてべろりと平らげてしまいました！という恐ろしい話です。

というのも僕はじっと考えていて、最後の子豚は生き残ってオオカミを食べたということは、最初に食べられた一匹目と二匹目の子豚も食べたということなんですよ。イングランドの歴史というか、人々はそうやって生き残ってきたのかななんて考えたりしました。16見開きの少し長いお話ですが、僕も非常に気に入った絵本です。

次に携わつたのは大阪にあるメディカ出版という所からで、今度は骨格をテーマとした科学の絵本です。福音館書店で堀内誠一さんが「ほね」という絵本を出していますが、そのスズキコージ版ですね。

文章は鎌倉の歌うおじさま、中川ひろたか君です。中川君とは東京に来てから2回ほど仕事の話があったんですが予定が合わず、

今回ようやく実現しました。今まさに骨の絵本をやっていますが、これがもう本当に面白い！

今回もコラージュ技法で骨を切っています。歯の部分も取り外してパーツとして並べて、またこれにもロシア語を重ねているところですよ。



絵本学会は、来年は刈谷市で行われる予定ですが、刈谷といえ
ば瀬川康男さんですね。僕にとって瀬川康男さんは堀内誠一さんと
並ぶくらい僕を勇気づけてくれた方です。僕が20歳や21歳の頃
で瀬川さんがまだ四谷に住んでいたころ、堀内誠一さんと一緒に瀬
川さんのアトリエに行って絵を見てもらいました。

「お前さん、絵描きになるかい？」なんておっしゃって下さった
方です。

瀬川康男さんの世界は職人の世界、いや職人を超えていらして
いて言葉にならない。

以前「コージ、空気に模様があるの見えるか？」なんて聞かれ
て、僕は驚愕した思い出があります。

でも瀬川さんの絵には空気中にさえ模様がびっちり描きこん
であって、瀬川さんには見えているんだなあとか。

ある日瀬川さんが僕の絵を見て、「お前さん、点を打つ(描く)と
きはもっと綺麗に打ちなさい」と言われたことがありました。

瀬川さんは点一つ打つのだってくらくらするほど綺麗な点を打
ちますから、見事な絵になります。

一方僕の場合はばらばらになった筆で一心不乱ににぼんぼんと
打つから、きっと瀬川さんから見たら汚いっていったらありゃしな
い。近くから見ても遠くから見てもアバンギャルドにしか見えな
いってそんな点描画です。そしたら隣にいたアキノイサムさん
が「コージ、こんなに汚い絵は瀬川には描けないだろうって言っ
てやれ」なんて冗談を言ってくれました。スズキコージの汚さは誇っ
ていいと応援してくれたんですね。

木葉井悦子、飯野和好、荒井良二と僕の4人で東京都板橋区立
美術館で4曲の屏風にライブ・ペインティングをやったこともあり
ました。みんなでわいわい描いて、僕も絵具をつけてさあ描くぞっ
て屏風を見たら、さっきまで描いていた角のある牛の絵が消えて
いるんです。

あれ、どこ行っちゃったの？って見てたら木葉井さんが消し
ちゃってるの。ざあーって。あれは見事でしたね、もう何も言えま
せんでした。木葉井さんは僕にとって姉御って感じてましたからね。

チェコスロバキア・ブラハ生まれのヤン・シュヴァンクマイエル
さんという、僕も大変尊敬しているかなり怪奇なアニメーション作
家であり映像作家である方が2011年来日したときのことです。

白泉社のMOEという雑誌から、シュヴァンクマイエルさんにイ
ンタビューする人を探しているといわれ、恐れ多くも僕に声が掛
かって、チェコセンターまで行ってそこでインタビューすること
になったんです。僕は大喜びでしたし、当時ヤン・シュヴァンクマイ
エルは新作の映画も引っさげて来日していました。

彼は9月4日生まれのおとめ座で、この誕生日生まれは組み上
げていく画風が得意な人が多い。特にコラージュは映画を見ると恐
れいってよくもこういう奇抜なものを生み出せるなど。ある種の恐
怖です。

それでインタビューする時、僕はこんな質問をぶつけました。

映像の中で少女が地下室にりんごかじゃがいもを落としてしま
い、探しに行くわけです。真っ暗闇の階段の下へと降りて、地下室

のドアを開けていくと、少女はだ
んだん変貌していく恐ろしい世
界へと飲み込まれていく。

ヤン・シュヴァンクマイエルの作
品には「闇」が往々に登場するわけ
ですが、それは何故でしょう、と。

ナチス体験だ、という答えでし
た。戦争の記憶、戦争の恐怖とい
うものがシュヴァンクマイエル
の中であって、たえずナチスに引
張られていくんじゃないかという
恐怖が少年時代からあったみたい
です。それが彼の作品の中にヴィ
ジュアルで登場するんです。



それから面白かったのが、河童伝説ってというのはチェコスロバ
キアと日本にしかないっていうのご存知でしたか？

ヨゼフ・ラダの絵本を読んでいただけるとわかるのですが、チェ
コの河童は冬なんかは氷の下に住んでいて、氷の部屋があってス
トープにあたりながらパイプかなんかをふかしているんだそうで
す。シュヴァンクマイエルにチェコの河童はどんな姿をしているん
ですかと聞いたら、チェコの河童は緑のコケモモのようなタキシード
を着ていて、絶えず水を張ったバケツの中にタキシードの袖を入
れている。

するとタキシードを通して水が河童へ補給されるようになって
いる、というそういうキャラクターなんだそうです。

今年は松本猛さんに誘われて、トラットリア松本画廊というギャ
ラリー兼イタリアンなお店ができて、こけら落としということで僕
に個展をやれという企画が持ち上がりました。僕の絵をだーっと
飾って松本近辺の方々が集まってくれました。

今年も松本市民祭があります、僕も参加して11月の1、2、3
日は松本市内の路上で5、6メートルの路上ペインティングをする
予定です。路上ペインティングを是非見に来てください。真っ白い
キャンパスから5、6メートルの絵をはじめから描きますから面白
いですよ。

僕は今まであちこちで路上ペインティングをやってきましたけ
ど、例えば今日のこの舞台上でブルーシートを引いてキャンパスを
置いてバンド演奏を聴きながら描くことは可能なんです、やはり
一番面白いのは路上でやることなんです。最高に面白い。

例えば大震災が起こる前、神戸新開地という東京でいえば浅草み
たいな所なんです、そこで神戸を盛り上げようという企画があっ
て神戸のビルとビルの合間に色んな広場があって、街売りの人とか
屋台が出たり、アート関係の連中がやってきてオブジェを作ったり
……。

僕は沢田としき君と一緒に大きなキャンパスを設置してもらっ
てそこでライブペインティングをやったんです。

そして 2、3日かけてすっかり描き終わって、煙草をふかしながら「いい感じに描けたな」と思っていたら、酒臭いおっちゃんが近寄ってきて、「今日一日あなたの絵を見せていただいて一言だけ言いたい、あなたの絵にはセンスのひとつかけらもありません」とか言って去っていく。

そしたら別方向からまた酒臭いおっちゃんがやってきて「あなたの絵はめちゃくちゃいいぜ」という。

で今からそこの公衆電話で天皇陛下に電話して絵を見てきてもらうよう言ってあげるから 10円頂戴とかいうんですよ。

そういうから 10円あげたけど、天皇陛下は来ませんでした。

とにかくストリートでやっている、皆本当のことを言ってくる。銀座のプランタンの出入り口でライブペインティングやっていると、蕎麦屋の出前の人も行き帰りに僕の絵を眺めている状態ですよ。

銀座だからいろんな人がいるわけですが、僕が描いているとお婆さんが僕の肩をしきりに叩いて「ちょっと僕忙しいんだけど、どしたの」と聞くと、「高島屋はどこ？」って聞かれる。ほかに人通りはあるんだから、そちらに聞けばいいものをなぜわざわざ僕に聞く……。

要するに僕の絵を見たくない人も見てしまうっていうのが頻繁に起こるわけで、それがライブ・ペインティングの醍醐味なんです。

音楽に言い換えると今イスタンブールミュージックでパバズーラの『クロッシング・ザ・ブリッジ』とかセゼンアクスとか現役で活躍している連中のイスタンブールの街を中心にしたライブ映像とか見ると、あれも路上で始まっているんですよ。

路上で生まれて路上で死んでいく。これがとても僕そのもの、路上で行われる表現が僕自身のような、なんて思えるんです。

歌の方もやり出すと造詣が深いんですが、アイヌミュージックに近いですね。

一定のバージョンの歌を輪唱にしてどんどん繰り返していく。大体 3バージョンくらい。そして重ねていくと面白い。

これは僕がバリに行って実際に体験したことなんです。結婚式のパーティに参加したとき、20人くらいの人が輪になって歌った。

勿論テレビもラジオも何にもない山奥のようなところのセレモニーです。そこでこのような輪唱が延々と続くわけです。

体験したときは感激して、涙がナイアガラの滝のようにごんごん出てくる、でも顔は笑ってるんですよ。うれし泣きっていうんですかね。

僕が目指す絵の世界にもかなり近いなあと考えてます。この歌のようになれば最高だな。

東日本大震災の話になりますが、震災後気仙沼の子もたちと共に大漁旗に絵を描きに行きました。すぐ傍に横に 7、8メートルの船が湾岸に乗り上げてひっくり返ってましたね。

いわき市でも宮沢賢治展のフロントホールで 5メートルのセロ

弾きのゴーシュを描きましたが、僕の両サイドでは 2メートルぐらいのキャンバスに子どもたちがライブペインティングをやっている、その子どもたちの顔を僕は知っているんです。

いわき市のアリオスホールとかで 3.11 が起きる前から行ってましたから。

子どもたちにはみんな事情があって、福島原発も未だに収束していない。日本の政府も東電側も何もできない。

黒田征太郎さんは今でも福島の第一原発の近所の小学校で子どもたちと絵を描いていますが、先日お会いした時に、やっぱり子どもたちは元気がないんだよねっていう話をしました。これはとてつもない大問題です。

とにかくまず原発のスイッチを切らなきゃならんっていうのは当たり前なだけけれども、政府も電力会社側もまだ欲望の暴走をやらそうとしている。僕の手段は絵ですから、いろんなアーティストが参加して叫ばなきゃって思います。

手から手へとか降矢ななさんという方はチェコのアーティストに声をかけて、原発止めようという目的で全国を回っています。

絵描きが戦争状態で絵が描けなかったという恐ろしい時代は日本にもありました。

日本が戦争状態に入った時に絵具の配給が政府から絵描きにあったんですが、軍の都合のいい絵を描かないと支給されなかった。

先日京橋で藤田嗣治の大きな展覧会がありました。あるスペースだけは全部戦争画でした。その空間だけ暗い、ぞっとする部屋でした。藤田嗣治は描かざるを得なかったのですが、絵描きが絵を描けなくなってしまうというのは最悪の状況だと思いますし、あってはならないと強く思います。

最近、石牟礼道子さんの『苦海浄土』という本を読んでいて、僕が最も苦手としていた水俣病の世界の話が書かれているんですが、読んでみたら水俣という土地は大自然に溢れるとても美しい場所だったんですね。水俣の工業がまき散らす工場がくる前までは、漁師たちは夫婦で船に小さな七輪を乗けて、捕った魚を七輪で焼き、ご飯も海水でお米を洗って鍋で炊いて、水俣の海で食べていた。

そういう時代の記述があって、水俣病が起こる前と後のあまりにもひどい天国と地獄の激しさが凄まじいんです。そしてそれをまき散らしたのは僕たちなわけで。公害の果てが原発という連鎖になってしまった。だからもう止めないと。

子どもたちに絵が描けない状態は作ってはいけないし、安心して描ける状態をつくるのが願いです。

芸術文化大学ですから、そういうことも含めて考えていかなきゃならないと思います。（中牧まどか）

研究発表

研究発表 A室 大会 1日目(南 377教室)

座長: 今井良朗

大会 1日目の研究発表A室は、3件の研究発表が行われ、座長は今井良朗が務めた。PCからスクリーンへの投影が準備どおりにいかず、スタートが 5分ほど遅れあわただしく発表が始まったことをおわびしたい。発表はいずれも表現に関わるもので、教育現場からの絵本制作実践報告、アニメ絵本の考察、絵本を楽器で表現するワークショップの試みと、興味深いものだった。

●教育実践報告 5見開き絵本の可能性～横浜美術大学における絵本制作～

宮崎詞美(横浜美術大学)

デザインを学ぶ基礎として絵本制作を位置づけているために、全員が絵本に興味を持っているわけではない。そこからさまざまな工夫によるプログラムを設け、学生と対話しながら制作意欲を高めていく過程は、実践報告として分かりやすい。15cm×15cm、5画面 12ページの制約が、思考や工夫に発展するとした報告は説得力があった。絵だけでなく写真を素材にできること、コラージュや異時同図などの発見を促す学生との熱心な対話がかがえる。制作過程から絵本の特性を引き出す試みがおもしろい。

《発表要旨》

横浜美術大学のビジュアルデザイン領域では、2年生の後期に共通選択課題として絵本制作に取り組みます。デザインの基礎を学ぶ過程であることや 2ヶ月間の短い制作期間であることをふまえた、小ぶりの定型サイズで 5見開きの短編を規定にした絵本の課題です。少ないページ数と決められたフォーマットという制限のある中で何をどう表現するのか、学生は教員とのやりとりと試行錯誤の中で自分の表現を見つけていきます。

この絵本制作を経て 3年生には映像メディア・グラフィック・イラストレーションの各々希望のコースへと別れて進んでいきます。今回は課題発表から企画、イラストレーションの制作、DTPによる編集・印刷、製本、広告制作までのプロセスを報告するとともに5見開きの短編絵本制作の魅力と可能性、今後の課題について考察



します。また、その後 3年生になったイラストレーションコースの学生が自由な規格で制作した絵本作品も発表します。

●「アニメ絵本」とは何か

陶山 恵(東京工芸大学)

本発表は、アニメ絵本がいかにか曖昧に語られているか問いかけ、「アニメ絵本とは何か」を考察したものである。アニメーションとアニメは同じではない、と明確にしたうえでアニメーションと絵本の親和性についてまず論じた。発表要旨にあるように、アニメーションと絵本の関係を作品の具体例を挙げ 5つに分類し考察、そこからアニメーション原作を持たない「アニメ絵」の本について言及した。近年出版数も増えており新たな視点からの研究として興味深い。アニメ絵はセル画に由来する描法だが、「アニメ」は日本発祥の世界共通語になっている。「アニメのような」は、何に基づくのか、今後さらに考察していきたいという発表者のことばは、今後の可能性を感じる。会場との活発な議論もあり、意欲的な発表だった。

《発表要旨》

「絵本」と「アニメーション」は、共にビジュアルイメージと物語性を重要な構成要素として持っていることから、互いに親和性の高い表現方法であると言える。絵本がアニメーションに、アニメーションが絵本に表現し直されることも多く、ひとりの創作家が横断的にそれぞれの表現を手がけながら活動している例も多数ある。「絵本」と「アニメーション」の関係性を捉えることによりそれぞれの特性を考察していくことを大きな目的としながら、まず、現状の出版物の中から「アニメーション」と「絵本」とをキーワードとする作品を整理することを試みたい。この時、抽出された作品は以下の5つのカテゴリーに大別することができる。

- 1、アニメーション化された絵本作品
- 2、絵本化されたアニメーション作品
- 3、絵本とアニメーションのそれぞれに描き分けられた作品
- 4、アニメーションのスタイルを元に書籍化された絵本作品
- 5、アニメーション原作を持たない「アニメ絵」の本

いわゆる「アニメ絵本」と銘打たれている出版物の多くは、「4」と「5」にカテゴライズされるものである。特に、「5」に相当する出版物は原作(=アニメーション)という実体がなく、「アニメ絵」を用いて構成された絵本として、比較的廉価に多数出版され、流通している。

では、この「アニメ絵」とはどのように認識され、定義されるものなのか。本発表では、分類されたそれぞれの作品例をあげながら詳細を確認しつつ、「アニメ絵」についての定義を試みる。そして、いわゆる「アニメ絵本」と、その他の絵本とアニメーションとを結びつける作品群との差異を明確に示すことによって、「アニメ絵本」が流通する意味と諸問題の所在について考察していきたい。

●絵本を楽しみ理解するワークショップの試み

～ブルーノ・ムナーリ作・絵「きりのなかのサーカス」を音で表現～
中川素子(文教大学名誉教授)

ムナーリの『きりのなかのサーカス』を基に、音楽として表現するワークショップの実践報告である。絵本を読むことが、視覚言語

を中心に語られることに対して、聴覚言語に着目したことが興味深い。音楽を専攻する学生が、異なった観点から絵本を読むことに触れたのがきっかけというが、絵本から音楽へのメディア変換の試みが、ワークショップとして行われたことがおもしろい。楽器演奏による『きりのなかのサーカス』の映像も新鮮で、あらためて絵本のことばと音、絵と音を考えさせられる。会場から、絵本の画面も同時に見れるといいとの意見もあった。

《発表要旨》

学校、図書館、美術館などで、絵本ワークショップが試みられているが、いまだに<読み聞かせ>中心のものが多い。絵本を楽しむ理解するためには、<読み聞かせ>だけでなく、絵本を見る人の視覚言語理解をすすめる、表現力や想像力を触発し、コミュニケーションをはかる多様な方法があるのではと、拙編『絵本ワークショップ(仮)』を企画し、11人の方と、33のワークショップをすすめている。

本発表は、その中の一つ、ブルーノ・ムナーリ作『きりのなかのサーカス』を音に表現してみるワークショップである。文教大学大学院教育学研究科の筆者の授業「美術科教育法特論2」で、五線譜を用いない図形楽譜を書くことから始めたものだが、実際にすすめてくれたのは、院生の小原梢さんと廣川遥さん、また2人の呼びかけに集まってくれた、吹奏楽部の学生たちである。

全員、この絵本には初めて接したようだが、ワークショップを行う中で、絵本理解を深める様子がみとれた。たとえば、この絵本が3部構成であり、1部と3部はトレーシングペーパー、2部は色画用紙を使っていること、出版社が変わることにより(八木田宣子訳による好学社版 1981→谷川俊太郎訳によるフレーベル館版 2009)、訳語のみでなく色画用紙の色が違っていること、この絵本が時間と距離の経過を表現していることなどである。

それまで即興演奏をしたことのない学生が多く、最初は緊張していたようだが、「管楽器と弦楽器で会話させよう」、「1部の最後と2部の初めのリズムセクションを重ね、サーカスがだんだんみえてくるのを表現しよう」などと意見を出し合う中で、「楽器の正式な使い方でない方法で音を出すとおもしろいね」、「わあ、その音、最高！」などと楽しんでいった。たった2時間半のワークショップであったが、5分のすばらしい曲ができあがり、ワークショップ効果を実感した。このことから、大人が子どもに良いものをといた絵本界で主流の意識に留まらず、絵本を見る人の発信力にもっと目を向けるべきではと考えている。

研究発表 B室 大会 1日目(南 378教室)

座長: 藤本朝巳

大会 1日目の研究発表 Bでは、南 378教室を会場とし、1.「手づくり絵本とその読み聞かせがもたらす受容体験」(伊東久実)、2.「米国教育使節団からの『本の贈り物』(Gift of Books)のなかの絵本Ⅱ — 選択基準と絵本一」(細川七重)、3.「外国語活動のための絵本の選定に関する考察 — 絵の動きを中心に—」(永井雅子)の3件の研究発表が行われた。座長は藤本朝巳が務めた。

1日目のシンポジウム直後の研究発表でもあり、会場には大勢の

方々が参加して下さった。研究発表はいずれも個性的で、会場では熱心な、そして興味深い質問応答もなされ、充実した研究発表であった。

●手づくり絵本とその読み聞かせがもたらす受容体験

伊東久実(身延山大学仏教学部こども学コース)

発表者は絵本作りの活動を、いわゆる、PBL(Program Based Learning)として、学生が(主体的、積極的に)課題に取り組む授業を実践されていると思われる。保育者養成校の多くは、絵本作りを「現場で実際に使える技能を身につける」、「製作した絵本を保育実習に活かす」と位置づけ、知識や技能の向上をめざす。しかし、絵本の完成時点で終わらせず、その読み聞かせまでも活動に含むと、学生に新たな次元の体験を与えることができる。すなわち、絵本作りを通して、学生自らが受容されると同時に他者を受容する体験、さらに自己肯定感の育成であると位置づけておられ、興味深い発表であった。

本発表では、一人の学生の事例を挙げ、上記の過程や結果 — 学生の絵画表現と文章表現活動の様子を詳細に示された。そして、保育者養成校における絵本製作の意義を、保育者の学びに不可欠な「受容体験」「関係性から育まれる自己肯定感」の視点から発表された。

発表者は、絵本製作とその読み聞かせの過程で得た学生の経験を次の4点に整理して説明された。① 没頭体験・意欲の喚起、② 自らが受容される体験と他者を受容する受容体験、③ 自己肯定感、④ 心理的わだかまりの昇華。これらが、保育におけるカウンセリングマインドの形成や、自己肯定感を子どもたちに育む保育など、今求められる保育者への学びにとってきわめて重要である。また、これは教師が教え導く「発達としての教育」ではなく、「生成としての教育」である。保育では、保育者が子どもたち自身による主体的な学びの獲得を重要視するため、絵本製作は保育における学びの疑似体験として意義も持つ。多くの場合、絵本製作の活動は絵本の完成と共に終了する。しかし、絵本製作の関係性を育む特質にも着目すると、保育者養成の指導の在り方に新たな可能性が生まれると提言された。

●米国教育使節団からの『本の贈り物』(Gift of Books)のなかの絵本Ⅱ — 選択基準と絵本一

細川七重(絵本学研究所 研究員)

本発表は、昨年(2019)の第15回絵本学会大会での研究発表「米国教育使節団からの『本の贈り物』(Gift of Books)のなかの絵本」に引き続き、そのⅡとして、子どものための本のリストを策定した選択基準によって贈られた絵本を調査したものである。歴史的事実を検証し、多くの図版も示しながらの充実した研究発表であった。

発表ではまず、戦後の日本は、GHQ(General Headquarters 連合国軍最高司令官総司令部)の占領下におかれ「軍国主義的、超国家主義的教育」体制を一掃するという教育の基本政策を実施するため積極的に改革がすすめられたこと、その目的のために、優れた教育専門家で構成された「米国教育使節団」(The United States Education to Japan: USEMJ)は、ストッダード(George D. Stoddard イリノイ大学名誉総長、ニューヨーク州教育長官)を

団長とした 27名が 1946年 3月 5・6日に日本に派遣され「米国教育使節団報告書」(Report of United States Education Mission to Japan)を作成したという事実を示された。

また、児童書に関しては、「米国教育使節団報告書」の第 5章の「公立図書館」の項に、当時の日本に児童書が少ないことを危惧し児童期の教育に重要であることを指摘している文面が記述されていること、さらに、使節団一行が教育の実情を把握するため約 1ヵ月間、日本の施設や学校を視察した折、公共図書館などに児童書の所蔵が少ないことに強い印象を受けた結果の報告書であることを、資料をもとに提示された。

アメリカ帰国の前日、最後の会合で「日本の民主主義に対する使節団の関心の象徴として」書籍を贈呈することが決議され、日本の子どものためにアメリカから多数の児童書(絵本を含む)が「本の贈り物」として寄贈されることになったという。

「贈り物委員会」の委員長に任命されたカルノフスキー(Leon Carnovsky シカゴ大学、図書館大学院副院長)は、シカゴ大学教材センター(Center for Instructional Materials)の図書館員ブルックス(Alice R. Brooks)に子どものための本のリストを依頼した。

その時の贈り物委員会が策定した選択基準は、「日本のための選書方針」(“Principles for the Selection of Books for Japan,” No date, ALA Archives, 24/2/6, Box10.)として、10項目が挙げられている。(中村百合子・三浦太郎 占領期における教育使節団からの「本の贈り物」日本図書館文化史研究会 2001 図書館文化史研究(年刊) 第 18号)項目: Picture Books and Easy Reading 絵本とやさしい読物(1-41)の中の日本語訳されていない絵本を紹介し、なぜ日本で出版されていないかを検証した。

以上、戦後日本の児童図書に関する歴史的事実を綿密に調査しての発表であり、今後の研究の継続を期待できる発表であった。

発表した絵本は下記 6冊である。

1. Denney, Diana., The little red engine gets a name. Pictures by Lewitt-Hem, Transatlantic ars, 1945
2. Falls, Charles., A B C book, Doubleday, 1923
3. Jackson, Kathryn., Farm Stories, Simon & Schuster, 1946
4. Sayers, Frances Clarke., Bluebonnets for Lucinda, Illus. by Helen Sewell, Viking, 1934
5. Sayers, Frances Clarke., Tag-along tooloo, Viking, 1941
6. Teal, Valentine., The Little Woman wanted noise, Pictures by Robert Lawson, Rand, McNally, 1943

●外国語活動のための絵本の選定に関する考察—絵の働きを中心に 永井雅子(神奈川県足柄上郡中井町教育委員会英語活動アドバイザー)

発表者は、絵本を用いて、児童英語教育を長く実践しておられる。今回は、その活動や教材研究を通しての発表であった。

絵本は、楽しみながら外国語に慣れ親しむことができる教材の



ひとつとして、小学校や幼稚園で取り入れられている。2011年度から小学校で外国語活動が必修化されたこともあり、児童英語教育の分野では、まとまった量の英語の理解や、単語の認知と意味理解に対する効果などの実証研究において、絵本が有効な教材であることが数値化されて示されている。そこでは、物語絵本が取り上げられ、文章が分析の主要な要素となり、絵は文章理解を助けるものとみなされている。そして、多くの場合、語彙数や文法がレベル別に整えられた教材用絵本を用いている。

しかし、発表者は、以下のような事実を提示し、発表された。上記のような実際の教育活動の一方で、小学校や幼稚園での読み聞かせの場面で、子どもが絵本(教材用絵本ではない)の絵を食い入るように見ていることを発表者は見聞きしているし、担任教師からの自由記述の授業振り返りの中にも同様の感想が見受けられるという。絵と文章が複雑な関係性にあるようなポストモダン絵本においても、子どもが絵を読み解く優れた能力を発揮することは、実証研究などでも指摘されているとおりである(Children Reading Pictures, 2003, Children's Picturebooks, 2012 など)。それゆえ、外国語活動のための絵本の読み聞かせであっても、子どもが内容を類推し、読み取り、能動的に関わろうとする動機という点で、絵や、絵とことばとの関係性が重要な要素であるといえる。

発表者は、英語の入門期にある子どもたちを対象にする際、絵本の選定について、二つのアプローチから考察し、ジャンルや絵の働きを中心に考えることの重要性を提言された。一つは、経験豊かな英語教員が「使いやすい絵本」として 60冊程度を分析し、それらが、絵自体、もしくは絵とことばの関係性が絵本の面白さを生み出すという絵本であり、かつ、物語絵本に限定されない幅広いジャンルの絵本であることを検証された。また、もう一つの方法としては、ほとんど文字のない絵本、Good Night Gorilla (1994)に対する子どもの反応を、授業のビデオ録画にある子どもの発話から分析し、子どもが絵本の世界に引き込まれ絵とことばのギャップを想像力で埋めることが発話につながり、同時に英語教育にも有効であることばのやり取りとなることを発表された。

今回の発表は、日本の児童英語教育の陥りがちな、文章中心、物語中心の在り方に、絵の読み取りという一つの視点を当てる有意義な発表であった。今後の活躍が期待される内容であった。

研究発表 A室 大会 2日目 (南 377教室)

座長：香曾我部秀幸

大会 2日目の研究発表A室は、4件の研究発表が行われ、座長は香曾我部秀幸が務めた。

2日目の午後の最初のプログラムということもあり、会場はほぼ満席の状態、熱気あふれる研究発表となった。発表者には美術館の学芸員2名が含まれ、発表のテーマや対象、研究の視点もバラエティに富み、絵本研究の幅広さ、奥深さを感じさせるものであった。ただ、30分という限られた短時間(実質20分)の口頭発表では、その内容が十分に伝えられないまま発表を終えなければならず、もどかしさを感じたのは筆者だけではないだろう。

●メタモルフォーゼする宇野亜喜良のイラストレーション

松本育子(刈谷市美術館)

発表者は、2010年に刈谷市美術館で開催した宇野亜喜良の展覧会準備の際に調査した原画作品と文献資料のデータをもとに、宇野亜喜良の絵本表現に見られる特性について分析、とくにその表現の特色として、メタモルフォーゼの手法に焦点を当てて考察を行った。具体的な作品画像を用いての発表であり、宇野亜喜良の表現の多彩さについてあらためて見直すことを喚起される興味深い発表であったが、時間の制限のために、一般に目にする事のない素描や原画の紹介に留まり、その絵本表現の本質を深く分析するところまでに至らなかった点には物足りなさを感じた。

《発表要旨》

宇野亜喜良の絵本の代表作としてあげられる『あのこ』(理論社、1966年)には、表現においてメタモルフォーゼ(変身、変態)の手法が取り入れられている。中でも、見開きページを用いて構成された、主人公の少年と少女の体が馬の足へと変わっていく場面は、読者にインパクトを与え、絵本の幻想性を際立たせている。宇野は、こうしたメタモルフォーゼの手法をデフォルメと同様に現在まで絵本表現に取り入れているが、当初はグラフィック作品の制作において手がけ始めた手法である。

今回は、このメタモルフォーゼの手法に着目し、宇野のグラフィック作品と絵本表現の関連性を分析的に考察したいと思う。分析の対象とする資料は、2010年に刈谷市美術館で開催した展覧会



準備のため、調査した作品(原画)と文献資料のデータである。また、対象とする時期は、宇野がデザイナーとして活動を始めた1950年代から、広告のイラストレーションなどで頻りにメタモルフォーゼの手法を展開した1960年代の仕事を中心に取り上げる。

宇野の絵本デビュー作は、『どうぶつ えとおはなし』(エンゼル社、1957年頃)であるが、子ども向けの書籍にメタモルフォーゼの手法が初登場するのは、『母の友』(福音館書店、1960年、11月号)の長沢節の自伝「芽」における少年像の表現からである。1950年代のメタモルフォーゼを用いた作風は、同時期のグラフィック作品と同傾向であるが、1960年代において、天井桟敷のポスターなどの仕事のジャンルが広がるにつれ、メタモルフォーゼの手法は多様となり、変化を遂げていく。具体的な作品画像等を用いての発表を通じて、そうした手法の変遷を明らかにしたい。

●絵本『ブルムカの日記』についての考察

松方路子(安曇野ちひろ美術館)

本発表は、イヴォナ・フミエレフスカという、日本ではほとんど知られていないポーランドの絵本作家について言及し、安曇野ちひろ美術館で原画を展示した『ブルムカの日記』について、その表現を考察するものであった。ポーランドの教育家コルチャックの行跡を描いた本作品は、64ページという絵本としては長編のもので、かなり複雑な特異性を持っており、その魅力を1)作家、2)史実とフィクション、3)絵に託された意味という3つの視点から検証・分析を試みた。先行研究のない、限られた僅かな資料の下での意欲的な研究姿勢は高く評価できるものの、本発表もまた発表時間の制限によって、作家と作品の紹介にとどまってしまうことは否めない。

《発表要旨》

『ブルムカの日記』は、ポーランドの絵本作家イヴォナ・フミエレフスカがドイツの出版社から、2011年に出した自作絵本である。64ページという、比較的多い頁数ということの他にも、この絵本のもついくつかの特異性は、絵本をそのストレートなテーマとは反対に、少し複雑なものとしている。この1冊を3つの視点から検証・分析し、この絵本のもつ難しさと魅力を考えてみたい。

1. 史実とフィクション この絵本のメインテーマは、ポーランドの教育家・医師のヤヌシュ・コルチャックである。彼は、1942年にナチスの強制収容所で死亡するまでに、児童文学作品や教育書も執筆した実在の人物であり、彼をテーマにした映画、絵本なども出版されている。この絵本では、ブルムカという架空の女の子を主人公とし、登場する、他の孤児院の子どもたちも、作者が作り上げた存在である。事実と、架空を混ぜる効果は何か。また、事実と、作者の創作を、分けて考える必要はあるのだろうか。

2. コラージュされた絵、シンボル 『ブルムカの日記』では、ページごとに様々な要素が画面に、貼り付けられ、見る物に注意を喚起している。その要素にはそれぞれ意味が含まれており、その意味を知っていなくても、知っていてもよい、と作者は言う。文化、歴史の知識をもっている人と、そうでない人がこの絵本の絵を見ると、伝わるものはどう変わるのだろうか。

3. 絵本画家イヴォナ・フミエレフスカ 母国のポーランド国内よりも、国外、特に韓国での絵本の出版が多い、特殊な絵本作家、

フミエレスカが、絵本制作を本格的に始めたのは約 10年前である。今年もポーロニャでラガッツィ賞を受賞したが、彼女がどのように絵本について「独学」していったか、彼女を支えてきた人の言葉などを通して明らかにするとともに、これまでの作品と、『ブルムカの日記』を比較してみる。

●「もくもくやかん」論 一かがくいひろしの絵本に見る「もの」と「動き」

鈴木穂波(岡崎女子短期大学)

発表者は、ここ数年継続してかがくいひろしの作品の研究に取り組んでいるが、本年度の発表では、本来は生命を持たない「モノ」を登場させる作者の特異性-「擬人化」という概念では収まらない「生命感」-に焦点を当てた興味深いものであった。近年、絵本表現の分析・考察において、様々なアプローチがなされているが、物語の解釈論ではなく、視覚表現の特性を分析することによって作者の表現理念-絵本観-を追求しようとする本発表は、きわめて斬新な視点が感じられ、今後の絵本研究の一つの方向を指し示すものとして評価できるものであった。

《発表要旨》

かがくいひろし(1955-2009)の作品では、人間が登場せず、生物や植物、そして日用品や食品などの「もの」が生命をもった姿で描かれる。その姿からは、「擬人化」という言葉では収まらない、「もの」そのものが命をもつという印象を受ける。

かがくい作品は、大きくファーストブックと創作物語絵本とに分けることができる。ファーストブックでは背景や場面設定などの要素がそぎ落とされ、「もの」のもつ生命感が際立つが、創作物語絵本においても、私たちの世界にそのままそれらの「もの」が存在しているという、ファーストブックとはまた違った「もの」の生命感を感じ取ることができる。本発表では、創作物語絵本の中から、デビュー2作目で他の作品とも共通する部分をもつが、最も根本的なところを描いていると思われる『もくもくやかん』(偕成社、2007)をとりあげ、その「もの」と「動き」に着目する。

本作品では、主人公のやかん、そしてポットやじょうろ、きゅうすが生命をもち、特に息をすってはく、というその動きは子どもたちと共に読むと、自然に身体全体で受け止めていると感じられる。やかんという丸みとくびれをもち立体感のある造形、ふくらむという動きや変化、擬音語や擬態語を中心としたことばと音、文字のレイアウトなど、この絵本を形作る様々な要素を細かに分析していくことによって、やかんなどの「もの」がどのように生命をもつものとして描かれているのかを明らかにしていく。さらに、「擬人化」という定義とも比較しながら、かがくいひろしの絵本における「もの」の描き方とその捉え方の本質に迫っていきたい。

● 1920年代ロシア :アレクサンドル・ロトチェンコのフォト・モンタージュ絵本『みんな動物になった /Self-animals』

鉢呂光恵(藤女子大学)

アレクサンドル・ロトチェンコは、近年日本でも展覧会などでたびたび紹介されるロシア・アヴァンギャルドを代表する作家のひとりだが、本発表は、そのグラフィック・デザイナーとしての仕事、

フォト・モンタージュという写真技法に焦点を当てつつ、1926年に制作された『みんな動物になった』(セルゲイ・トレチャコフ/詩、ロトチェンコ/写真・イラスト)について言及し、海外の絵本の研究に新たな視点を加える可能性を感じさせるものであった。ただ、ロシア・アヴァンギャルドやフォト・モンタージュといった、近代西洋美術史におけるキーワードに精通することが前提条件である本テーマについて、準備が不十分であったことは指摘しておきたい。

《発表要旨》

写真の発明から 90年を経た 1920年代、通信手段や交通網の拡大に拠る都市環境の整備とテクノロジーの進展を追い風にして、写真を媒体とする 2つの芸術運動がヨーロッパに登場する。西はチューリヒからベルリンを経由し大都市パリに至るダダとシュルレアリスム(超現実主義)、東はヨーロッパの中心から遠く離れたモスクワの構成主義である。

構成主義の旗手として強烈なパーソナリティを発揮した美術家アレクサンドル・ロトチェンコ(Alexandre Rodchenko, 1891-1956)は、後にロシア・アヴァンギャルドと称される先行者達の無対象の抽象絵画を引き継ぎながらも、円や正方形といった基本的な幾何学形と木、鉄、ガラス等の異素材を組み合わせ、それに機能的で生産的な構造を与える構成主義に進み、建築、グラフィックデザイン等の領域で、新社会に適応した多彩な制作を行う。1921年に写真を選択した後は、表現媒体としてのフォト・モンタージュに注目し、さまざまな撮影法に取り組む。ほぼ同時期に始まったベルリン・ダダのフォト・モンタージュとは趣の異なるロトチェンコの実験的な写真は、やがて 1980年代以降の美術家にも示唆を与える。

『みんな動物になった』(制作 /1926年、出版 /1929年)は、詩人のセルゲイ・トレチャコフが書いた詩に、ロトチェンコが写真とイラストを付けたフォト・モンタージュ絵本である。ヴァーニャという名前の男の子がサーカスの動物たちに変身するというおはなしに合わせて、ロトチェンコは、妻で美術家のヴァルヴァラ・ステパーノヴァと、白いボール紙でできたシンプルなかたちの人形や動物をたくさん作り、蛇腹式のカメラを使用して白いテーブルの上のランプの灯りだけで撮影した。

研究発表 B室 大会 2日目(南 378教室)

座長: 今田由香

大会 2日目の研究発表 Bでは、南 378教室を会場とし、視点やアプローチの大きく異なる4つの研究が発表された。

水島尚喜さんの発表では、「映画好き、アイドル好き、人間好き」といったかがくいひろしさんの素顔、人柄や子どもへの想いを窺い知ることのできるエピソードが伝えられた。また、かがくいさんが手遊びを行う様子を撮影した映像も公開された。これらは、かがくいひろしとその絵本の研究者にとって実に貴重な資料である。同日別室では鈴木穂波さんによる「『もくもくやかん』論-かがくいひろしの絵本に見る「もの」と「動き」」が発表されたが、会場が同じでなかったことが悔やまれた。2番目の発表者、永田桂子さんの研究は、大正時代の絵本論を参考に、乳幼児・児童絵本に何が重要なのかを言

語化する、その可能性を探る意義のある試みであった。子どもに何を手渡すかを真剣に議論し、それを言葉にしていくことは簡単ではない。しかし、表現と読書の自由を阻むこと無く、それができる場、そしてその責務は絵本学会にあると思った。3番目の発表者吉田久実さんは、子どもたちが『これはのみのびこ』と『ロボット・カミイ』を楽しみ、それらの作品にインスピレーションを受けて絵本を手作りしていった事例を紹介した。参加者からは、活動の経緯に関する質問が多くあがり、絵本を介した幼児の創造的活動に対する関心や期待の大きさを感じた。最後の発表者、正置友子さんの研究は、『いないいないばあ』の表現の奥深さに関心を向けたものであった。私たちが人生の初期に出会う絵本が、その表現の根底に、生と死を内包するという指摘には新鮮な驚きを覚えた。スケールの大きい研究であったためか、発表が時間内に収まらず、最後まで聞くことが出来なかったのが残念だった。

4つの研究は着眼点も方法も違うが、幼い子どもを読者対象とした絵本を共通項としていた。人生のはじめりに出会う絵本、その表現と受容、そして研究の可能性と課題を確認する機会となったように思う。なお4名の研究発表の要旨は次のとおりである。

●「かがくいひろし論—畏友への思い—」

水島尚喜(聖心女子大学)

「だるまさん」等の作品で知られている絵本作家「かがくいひろし(本名:加岳井広,1955-2009)」が急逝して3年半となる。発表者は、かがくいの大学時代の学友であり、3年次から4年次にかけて学寮生活をともに過ごした。本発表ではその立場からのエピソード記述を紹介する。

学生時代の彼は、常にデッサン帳を抱えていて、日常の様々なものをデッサンしていた。彼の専門は彫刻であったが、人体に限らず、動物や当時から自分で考えたキャラクターを描いては周囲の友人たちを楽しませていた。

さらに、無類の映画好きであった彼は、映画の登場人物のものまねをよくしていた。

(特段に上手いとはいえなかったが。。。)ものまねのみならず彼の絵本作品の根底には、チャプリン映画の「悲しみの中の笑い」やフェリーニ作品の「多様な人間模様」に惹かれていた彼自身の人間性があった。

そのような彼から発表者へ、卒業時の退寮の際に手渡された一枚の文面がある。以下は、彼の枕元にクレド(我が信条)として貼られていたものである。

「効果があればやる、効果がなければやらないという考え方は合理主義といえるでしょうが、これを人間の生き方にあてはめるのは間違いです。この子どもたちは、ここでの毎日毎日が人生なのです。その人生をこの子どもたちなりに喜びをもって、充実して生きていくことが、大切なのです。わたしたちの努力の目標もそこにあります。」ドイツ、ピールフェルトのベテル施設修道女

彼が受講していた当時の障害児教育関連のテキストからの一節であるが、彼の子どもへの眼差しに繋がる重要な視点が含まれている。

いくつかのエピソードをもとに、彼自身の絵本観及び世界観を

考察しながら、故人を偲びたいと願う。かがくい作品の具体的な描画方法などによる作品分析については、後に機会を設けたい。

●「乳幼児・児童絵本の要件」の史的考察—大正時代の絵本・絵雑誌論を参考に—

永田桂子(京都女子大学)

近年(特に1980年代以降)、絵本の対象は成人に広がり、文献資料も原画展図録が確実に増加(特に2009年以降)している。原弘の「…いわゆるく見る本」を含めて、おとなの絵本の世界は、さらに開拓されていくだろう。…(『季刊 グラフィック・デザイン』創刊号 芸美出版社 1959(昭和34)年11月)が的中した。おとなの鑑賞に堪える、美術的価値の高い作品が制作されるのはよいとして、児童観とは無縁に制作される作品も少なくない。児童絵本・絵雑誌に児童文化財としての関心が集まり、多くが語られた大正時代の絵本論を参考に、乳幼児・児童絵本の要件及びその言語化の可能性を探ってみた。なお、戦前に絵本・絵雑誌の主な対象とされた子どもの年齢は、現在でいう3~8歳位である。

大正時代に絵雑誌・絵本を論じたものには、色彩にふれたものが多い。「恐しき子供雑誌の色彩」と題したもの、「…実際日本で発行される多くの子ども用絵本はあまりに彩色が多過ぎる、又俗悪に過ぎる」との苦言、「(「コドモノクニ」は)印刷と用紙とのいゝ点から色彩の点もよくいつて居ると思ふ。たゞ全體として、餘り情緒主義の内容が多くて、知識主義の点が缺けてゐるのは缺點である」という評価などが存在する。これらが1926(大正15)年配布の冊子「子供の繪本」(文部省)に掲載の「繪本の要件」に繋がっていく。では、現在はどうのような表現がなされているか。例えば『よい絵本』(全国学校図書館協議会)では「芸術的なかおりの高いもの」とある。色彩は内容に即して、また画家の感性に委ねられるものではあるが、一方に乳幼児特有の受け止め方も存在し、教育者達の願いも存在する。言語化はむずかしいものの、先人たちの表現を参考に文章にすることは不可能ではない。学問領域の専門分化が進み深められている今日、各領域の知見を総合した適切な乳幼児・児童絵本の要件が構築できると考え、その可能性を考察する。

●絵本からはじまる絵本づくり~子どもたちとのパロイディ~

吉田久実(白梅学園大学短期大学 実習指導センター)

絵本『これはのみのびこ』(谷川俊太郎・作、和田誠・絵)、『ロボットカミイ』(古田足日・作 堀内誠一・絵)は、共に子どもたちに人気の高いロングセラーの絵本であり、物語である。本の中で選ばれていることは、ストーリーや絵は大変魅力的であり、保育の場において、様々な活動のきっかけとして取り上げられることも多い。

『これはのみのびこ』はことばを重ね、加えてことば遊びを楽しむみつつ新たなストーリーを展開していくことにより、繰り返しなどのことばのリズムを楽しみながらユニークな物語をも楽しむことが出来る。『ロボットカミイ』は主人公カミイの破天荒さが人気ながらも、「ちびぞう」の人気もとても高い。両作品共に、ことば遊びやストーリーに対する興味が深い保育クラスにおいては、様々な形での“創作活動”へ展開していくことが出来る。

筆者は、自身の保育経験の中で、これらの絵本の読み聞かせから、5歳児クラスの子どもたちと共に絵本の共同制作活動をした。子どもたちも保育者も、日常の保育室で絵本に親しみ、絵本との関わりの中から絵本の創作活動が生まれた。そこでは、子どもたちの想像力、言葉や描画表現の工夫が発揮され、保育者が思いつかないようなストーリー展開がみられた。これは絵本の原作のストーリーや手法に魅力があったからこそであると思われるのであるが、オリジナルなストーリーへと展開していった子どもたちの、既成の話をなぞり真似しつつも、新たに想像することが出来る力を感じた。つまり、子どもたちの原作の絵本を楽しむ力と同時に「パロディー力」について考えさせられたのである。また、複数の子どもたちが1つの創作に関わっていくという、共同制作ならではのアイデアの豊かさ、ユニークさも作品に現れているように感じられた。

一以上、子どもたちと「パロディー」について考えてみたことを、子どもたち創作の絵本をお見せしながら発表したいと思います。

●『いないいないばあ』（松谷一瀬川）を通して絵本表現の可能性を考える—「ばあ」で「生」が始まり、「いないいない」で「生」を終える—
正置友子（絵本学研究所 主宰）

昨年度の発表では、リミナリティ論を通して『三びきのやぎのがらがらどん』について話しました。リミナリティとは、ひとつの「生」を生きるだけで越えなければならない過程、すなわち「通過儀礼」であり、ひとつの状態からもうひとつの状態への「移行段階」をさします。人生というものは、誕生から始まって、入学、思春期、就職、結婚、親になること、退職、そして死という一連のリミナリティの段階から成り立っています。また、仏教用語に、人間として避けられない四つの苦しみとして「生老病死」という言葉があげられます。生まれること、老いること、病気になること、死ぬことです。

リミナリティ論でも、仏教用語でも、最初の「通過儀礼」あるいは「苦行」は、生まれること自体にあります。この世に「生」を受けて生まれることは、医療や衛生状態が改良されていない時代や地域によっては、母体も新しい命も危険にさらされるということがあります。ここではもっと根本的に、「生まれる」ということを考えてみますと、あかちゃんは、生まれる前まで母親のからだのなかで、臍の緒を通して何不自由なく母親から直接に「食」を得、衣食住の心配はなく、暖かく守られて生きていたのですが、ある時、突如として、母親のからだから切り離され、呼吸も自分でしなければならず、「食」も自分の口で得なければならず、とにかく衣食住全てにわたって他者の誰かとの関係性のなかで得て、生きることになります。他者の存在なくして生きていくことは不可能です。さらに、「生まれる」ということは、いつか「死ぬ」ことを前提としています。「誕生」は、「死」を内包しており、理不尽なことですが、「誕生」と同時に、「死」に向かって生きることになります。

生まれてまもなくのあかちゃんたちから3歳代までの子どもたちと共に、松谷・瀬川コンビの『いないいないばあ』を、数えきれないほどの回数を読んできました。幼い子どもたちと読むことで、この絵本について気づくことがいくつかありました。最近になって気づいたことは（多分、私の年齢も手伝ってでしょう）、あかちゃんた

ち（人）は「ばあ！」とこの世に誕生し、いつか、その子（人）の「生」を終え、「いないいない」とこの世界から去るということ、その間が「生」であるということです。今回の発表では、『いないいないばあ』（松谷一瀬川）を通して、「生きること」を考え、絵本表現の可能性を考えてみたいと思います。



作品発表

これまでの作品発表では、限られた発表時間で作品の全容を紹介した後に質疑応答を行う形式であったが、本大会では大学ギャラリーを会場とする作品展示の環境が整えられたため、展覧会という方法によって、作品鑑賞の時間を十分に確保することができた。また、今回の発表では作品展示に合わせて事前提出のコメントを大会プログラムに掲載することによって作品理解の促進をはかり、作品発表当日は、一定の時間内、展示作品の前で発表者が参加者と自由にディスカッションを行う懇談会(ギャラリートーク)の形式を導入した。

従来形式では、一人あたりの発表時間が10数分程度であったのに対し、今回は、プログラムで割り当てられた発表時間(約2時間)を発表者全員で共有する結果となり、発表者と参加者との距離も近く、展示された作品を前にすることで、いっそう充実した意見交換を実現することができた。以降に発表者のコメントを転載する。

(佐藤博一)

●『しわしわライオン』

あわやまり(詩人)・からさきまい(作家)

お風呂にひとりで入れないなっちゃん。ある日がんばって入ってみると、陽気なしわしわライオンが現れます。しわしわライオンが連れてきたのは、なんだかおかしいサーカス組。しわしわの輪車に、しわしわの輪くぐり。そんなしわしわライオンたちは、どこからやってくるかな？

お風呂が嫌い、怖い、という子たちへ贈る、心も体も温まる愉快で不思議なお話はなし。

●『こゆりとやさい王国』

藤重育子(愛知東邦大学)

この作品は授業内において学生と共に考え製作しました。

あらすじをご紹介します。主人公「こゆりちゃん」は野菜嫌いな女の子。ある日お父さんが読んでくれた絵本の中で、強い野菜ヒーローがいることを知ります。その後様々な出来事に遭遇し、苦手な野菜との距離を少しずつ縮めていく物語です。こゆりちゃんの頑張りともわりのサポートに、読み終えた後、きっと心が温かくなるはず…。

『おかあさん』

●趙岬一(京都造形芸術大学大学院生)

中国は昔と比べ、劇的に変化しました。建国後の文化大革命による混乱、1970年代の改革開放による目覚ましい経済発展、また、民主意識が強まる80年代の天安門事件。それぞれの時代を大きな背景にし、普通の人である私の祖母と母、女性二人の生活を表した。女性である二人の人生は激しい時代の変化を経験しながらそれぞれの時代の中で、一般人としての平凡さと母親としての偉大さをもち、生活を続けている話である。



●『動くしかけ図鑑 古代のいきもの① アノマロカリス生態図鑑』 『動くしかけ図鑑 古代のいきもの② ケツアルコアトルス生態図鑑』

池田美穂(岡山県立大学大学院生)

絶滅した古代の生物を題材に、その生物が発見されるまでの逸話や体の特徴などの情報を図鑑として一冊にまとめました。平面的な表現に加え、ポップアップや動くしかけといった表現を用いた体感しながら楽しく学べる図鑑です。

題材としたアノマロカリスはカンブリア紀に生息していた海洋生物であり、当時の生態系の頂点に立っていたとされます。また、ケツアルコアトルスは白亜紀に生息していた翼竜の一種であり、史上最大級の飛行生物といわれています。

●『ことば と うごき くぐるぐる ジグザグ』

別府浩実(貞静学園短期大学)

指で、線や形に触れながら読み進めていきます。ストーリーはありませんが、描画の発達段階がテーマです。人が初めて描く絵(スクリブル)の動きから始まり、身体の動きから派生する筆の痕跡、概念として捉える単純で幾何学的な形態、それらの形の組み合わせから発展するイメージ(見立て)へと展開していきます。言葉やオノマトペは、体験の道しるべとして動きや形を表しています。

●『シリーズ 半透明少女 〈snowy〉〈complex〉〈赤ずきん〉』

吉田麻美(岡山県立大学大学院生)

透ける素材であるレース模様やトレーシングペーパーを使用し、曖昧で繊細な少女の心情をテーマに、写真絵本という形で制作





しました。レースと雪でかなしみの感情を表現した「snowy」、少女の心の葛藤をテーマにした「complex」、愛らしくも毒々しい「赤ずきん」の3冊を合わせて、シリーズ「半透明少女」としました。透けによる不思議な視覚と、やわらかく繊細な世界をどうぞお楽しみください。

●「2と3」

宮崎詞美(横浜美術大学)

2次元の集積による3次元の存在である絵本の中に、変化する3次元の時空間を表現するとき、どのような方法が可能でしょうか。音と立体空間がシークエンス(視覚的連続性)によって物語性を持ち、視覚化する「平面によるしかけ絵本」の制作を試みます。レイヤーを用いたイラストレーションや言葉あそび、エンドレスの構造も、2次元と3次元を行き来し、目に見えない空間を脳内に構築する手がかりになるのでは、と取り入れてみました。

●「三月十七日」

内海優美(会社員)

ただ過ぎてゆく、ありふれた日。ふと、振り返った時、心によみがえるものがあった。特別なことなんて、何もなかったのに。繰り返される日を懐かしく思う時が来ると思ったおはなしです。

●「まあるい幸福」

林絵美(京都造形芸術大学学生)

この作品は、私の個人的な感情を、絵と言葉と物語というかたちをかり、表現したものです。絵本は私にとって、絵画だけでは言いきれず、言葉だけでは物足りない、表現しきれないものが、自分の心のかたちに近いありかたで、かたちになっていくもののように思います。絵画や詩のように、人との間に何かが残る、そんな絵本のありかたを探っています。

●「赤ずきんちゃんとおおかみ」

梁谷照代

2011年、絵本学会主催のワークショップ「手づくり絵本のススメ」オリジナル色紙の作り方を習いました。アクリル絵具で作るのですが、この色紙には絵具を重ねることによって偶然にできる色合いの美しさと模様の面白さがあります。気に入ったので、沢山作り、他の紙や違う素材を組み合わせたたりして遊んでいたら、絵本が一冊できました。



ラウンドテーブル

ラウンドテーブル 1

ユニバーサルデザイン (UD) 絵本

話題提供者 攪上久子(世界のバリアフリー絵本展実行委員長)
武田美穂(絵本作家)

コーディネーター 林左和子(静岡文化芸術大学)

前日のシンポジウム「共に生きること 絵本にできること」に引き続き、身体的、知的特性、年齢、文化を超えてみんなが楽しむことのできるユニバーサルデザイン(UD)絵本をテーマとした。

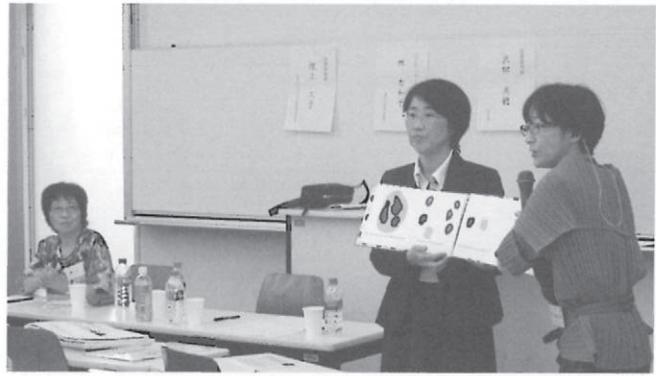
ラウンドテーブルは、攪上氏の、特別な配慮が加えられた本や一般絵本として出版されているが立場を超えて一緒に楽しむことのできる絵本の紹介から始まった(文末に紹介された絵本一覧を付した)。

特別な配慮が加えられた絵本には、点字付絵本、さわって楽しめる絵本、音の出る絵本、手話絵本、布の絵本など様々ある。大会のテーマ「あれも絵本 これも絵本」である。こういった多様な形態の絵本に触れることは、「絵本とは何か」「絵本とおもちゃはどう違うかの」を考える機会となった。

話題のひとつは、特別に作るということではなく、一般に作られている絵本の中にユニバーサルデザインのものを作っている可能性があるのではないかということであった。特別な配慮を加えられた絵本の多くに共通しているのは、読者対象が限定されている＝販売部数が限られること、印刷や製本などのコストがかさむことで、この結果、商業ベースにはのりにくい。この問題に対して、北欧では、絵本を楽しむことはすべての人のもつ権利という思想の上で、政府が出版援助を行っている。フランスやイタリアでは、出版にかかるコストを低く抑えるため、印刷や製本を工夫している。だが日本の場合にはそのような社会の仕組みはない。シンプルに絵だけでストーリーがつけられている絵本や視覚的イメージがないオリジナルなさわる絵本のように、読者対象を広げることで商業ベースにのせていくことに可能性が見いだせるのではないかと。

また、日本では、1970年代以降、主にボランティア団体により、布の絵本やさわる絵本が制作、提供されてきた。紹介された2点の布の絵本(『たのしいどうぶつえん』と『フレンチトーストをつくらう』)はいずれもボランティア団体の手によるものである。この2作品に限らず、内容、工夫ともに高い水準の作品を制作しているボランティア団体は少なくない。ただ、基本的に手作りとなるため、同じものを多数制作し、広く提供していくことは困難である。作品の保存、団体の継続といった点でも不安が残る。この点で、公益財団法人として布の絵本や拡大写本の制作や貸出(郵送)、製作キットの販売などを行っているふきのとう文庫は、日本における一つの可能性を示しているといえるかもしれない。

布の絵本が肢体障害や知的障害のある子どもを主な対象として工夫されているのに対して、さわる絵本は、主に視覚に障害のある人を対象としている。さわる絵本の制作にたずさわるボランティア団体がある。市販の絵本をさわる絵本に変換する取り組みは多く、



今回紹介された中でも、レオ・レオニの『あおくときいろちゃん』のさわる絵本版(フランスで出版)が含まれていた。こういった変換が、著者以外の人によって行われる場合、翻訳に似た再創作作業となるだけに、原作者の思いが忠実に反映されるかどうかといった問題が生じる。ラウンドテーブルで話題になった二つ目の点はこのことであった。絵本作家の武田氏が率直にその思いを語ってくれたが、絵本の場合、作家は、表紙から裏表紙まで、そしてページをめくることが場面が展開していく効果まで含めて作っている。変換した場合、その意図はどこまで反映されるのであろうか。出版・販売される作品については許諾が必要であり、著作権者(主に原作者)が確認を求めることも可能である。しかし、現行の著作権法では、販売を目的とせず「専ら視覚障害者などで当該方式によっては当該視覚著作物を利用することが困難な者の用に供するために必要と認められる限度において」は、必要な方式への複製(変換)は許諾を得なくてもできることになっている。つまり原作者の知らないところで、変換された作品が原作者の名前で提供される可能性があるということである。

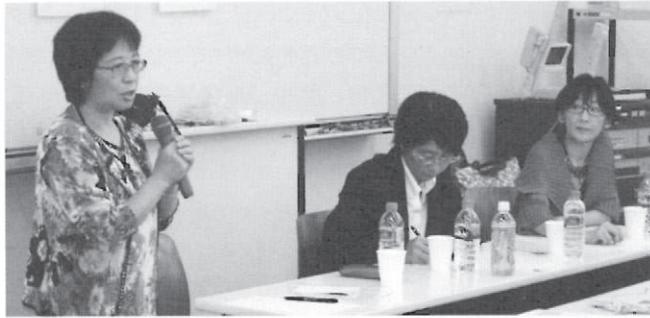
ボランティア団体の作品の著作権についても配慮が必要である。それぞれの団体の創意・工夫はその団体の権利であり、営利を目的としていないからといって侵害してよいものではない。著作権法でいう複製には、色を変えるなどの変更を加えないこと、原作者(団体)名の表示をすることは含まれると考えられる。

UD絵本の発展のためには、それぞれの権利を守る仕組み、及び配慮を加えた作品を出版・販売することができる仕組みが整えられていくことが求められる。さらに、シンプルにすることでユニバーサルを目指した絵本の創造も求められる。街の本屋さんや、図書館などどこでも、すべての人がそれぞれ楽しむことのできる絵本、RIGHT BOOKを見つけ出せることができる社会をつくっていくために、何をしなければならぬか、を考える機会となった。すぐに解決できる課題ではないが、会場から、絵本学会こそ、それを考えていくことができる場なのではないかという発言があったことに、希望を感じた。(文責 林 左和子)

●紹介された絵本リスト

1. 配慮が加えられた絵本

『The Dot』 作: Reynolds, Peter H. 出版社: BrailleNK (USA) (オリジナル: Candlewick Press) 原本: 『てん』 作: 絵: ピーター・レイノルズ 訳: 谷川 俊太郎 出版社: あすなる書房 [点字付き絵本]



『てんじつきさわるえほん しろくまちゃんのほっとけーき』わかやまけん 出版社 こぐま社

『Petit-Blue et Petit-Jaune』作: レオ・レオニ 出版社: Les Doigts Qui Rêvent(フランス) 原本: 『あおくときいるちゃん』作・絵: レオ・レオニ 訳: 藤田 圭雄 出版社: 至光社をさわる絵本としたもの

『Wir Geschwister』(ぼくたち 兄弟) 作: Kremer, Susann 出版社 Quirl (ドイツ) [さわる絵本]

『De wereld van Nijntje. Een doe-, voei- en luisterboek』(ミッフィーの世界 遊んでさわって聞ける絵本) 作: ディック・ブルーナ 出版社: Rubinstein(オランダ)

『Simon går till affären』(サイモンの買物) 文: Rehn, Annika 写真: Billeson, Göran

出版社: Landskrona Vision(スウェーデン) [手話・Easy to Read]

『Handtalk Zoo』(手でお話し動物園) 作: Ancona, George Mary Beth Miller 出版社 Four Winds Press(USA)[手話絵本]

『たのしいどうぶつえん』よこはま布えほんぐるーぷ [布の絵本]

『フレンチトーストをつくろう』てのひらの会(三鷹市)[布の絵本]

『これ なあに?』作: バージニア・A・イエンセン&ドーカス・W・ハラー

出版社 偕成社 [さわる絵本]

『Petit Souffle de vent』(風が吹いて) 文: Lodolo, Elisa 絵: Rintala, Aune 出版社: Fed. Nazionale delle Istituzioni Pro Ciechi/Les Doigts Qui Rêvent [みんなにとって見えなものをさわる絵に]

『Trotti, trotta, Coccinelle s'en va』(てんとう虫 山へ行く) 作: mantacheti, Tiziana 出版社: Les Doigts Qui Revent(フランス) [さわる絵本]

2. 一般絵本でも楽しむことのできる絵本

『ida e volta』(平らな足) 作: Machado, Juarez 出版社 Primor(ブラジル)

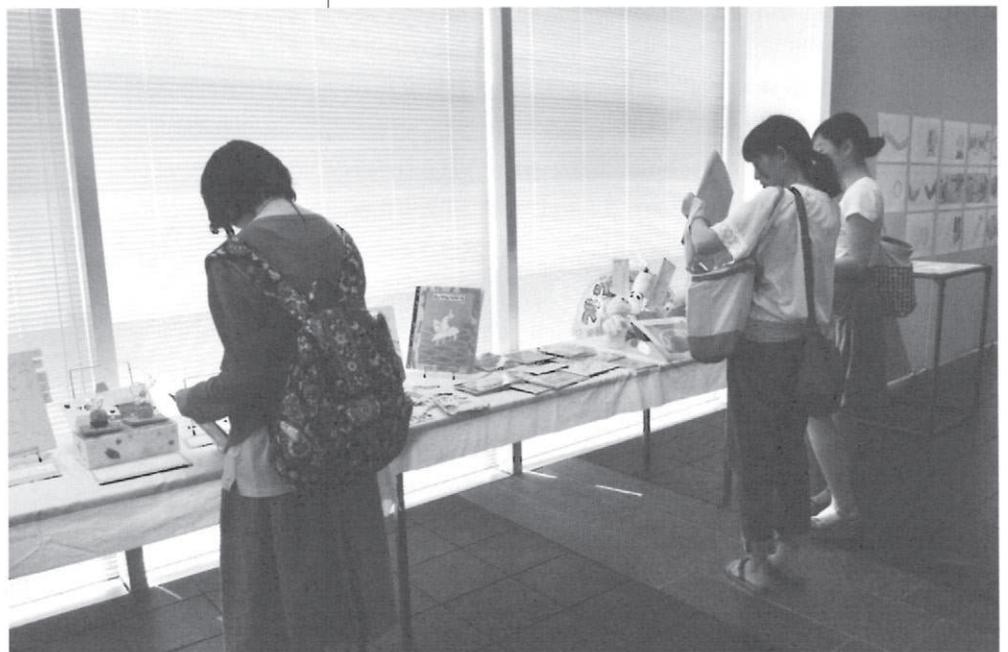
『くもさん おへんじ どうしたの』作: エリック・カール 訳もり ひさし 偕成社

『なみ』作: スージー・リー 出版社: 講談社

『ポッキーのわくわくサンドイッチ』作: 柳沢幸子 出版社: 世界文化社

紙芝居『みんなでぼん!』作: まついのりこ 出版社: 童心社

『かぜが はこぶ おと』作: 駒形克己 出版社: ONE STROKE





ラウンドテーブル 2

モノとしての絵本

話題提供者 佐井国夫(静岡文化芸術大学)、
藤本由紀夫(アーティスト)
コーディネーター 佐藤博一(京都造形芸術大学)

テーマである「モノとしての絵本」について議論する視点はいくつかある。例えば、特殊な印刷技術を用いたり、質感がある用紙を使用した場合に物質性が際立つ。手づくり絵本、布絵本、仕掛けのあるポップアップ絵本、ブックアートなども、電子メディアの台頭に対する「電源不要の本」として「モノ性」を強調している。今回の分科会では、話題提供者もコーディネーターも絵本作家ではない立場ではあるが、「モノとして」の対象を絵本に限定せず、包括的に捉え、結論を導き出すことよりも、絵本について考えるためのヒントを提供したいと考えた。

まず、一冊の絵本を通してテーマを考える導入とした。『ほんとに本はやくにたつ』(文と絵:クロード・ブージョン、訳:末松氷海子)は、ウサギの兄弟が大切な本を道具としてキツネを撃退する物語であり、コミカルではあるものの、考えさせられることが多い。また、この絵本の原題「Un Beau Livre」が「美しい本」を意味している点も興味深い。

さらに、分科会の導入では、辞書による「物」の英訳として、thing(存在感のある物体)、article(物品)、goods(商品)、matter(精神や心と対比して実体をもつ物質)、material(素材が際立った物)、property(所有できる物)、object(五感で知覚できる物体)、といった単語を確認し、「モノとして」という視点が多義性をもつことを共有した。

情報コンテンツと外観をデザインの立場で比較検証する場合、パッケージデザインという分野が示唆深く、話題提供者である佐井国夫氏には、パッケージデザインをテーマに事例を紹介していただいた。また、書物と読書を作品テーマのひとつとして国内外で活躍中のアーティストである藤本由紀夫氏からは、本と人間の関わり自体を再考する意義深い提言があった。

《佐井国夫氏による話題提供: 要約》

これまでグラフィックデザインを専門として、ポスター、CI、

VI、パッケージ、パンフレット、カタログなどを手がけてきた。絵本については、担当している学生の卒業制作で、地域の問題の提起と解決の中で、文化継承をテーマとした絵本を制作する、といったテーマの指導に取り組んでいる。絵本はパッケージと同様に、紙であり加工技術が必要とされるが、社会の問題解決にかかわるといった共通点もある。また、贈答(ギフト)という意味では、人から贈られた本に特別な思いが宿るように、見えない世界で贈る側、贈られる側のコミュニケーションが生

まれることも共通している。

中国殷王朝の頃にできたと言われる象形文字の中に、「包」という字があったが、これは、子を宿した母親の子宮から形成されていて、包むという行為の優しさと大切さを表象している。日本では古来から包むという習慣が受け継がれ、伝統的なパッケージには、いずれも自然の恵みである藁、土、竹、木、笹、紙などの素材が使われている。例えば、「おにぎり」を包む竹の皮は、ご飯を包む海苔が手につかず食べられる包装である。笹の葉で包んだ餅は香りが移って美味しくなる。天然の竹素材を利用した羊羹のパッケージは、持ち運びやすく涼しげである。割った青竹は食器の役割も果たし、杉の白木でつくった手桶は、素麺を涼しく爽やかに感じさせる。稲の藁を使った卵のパッケージは、藁が適度な緩衝材として機能し、安心して持ち運べるだけでなく、卵の新鮮さを視覚的に伝える。贈答品に使用される熨斗(のし)は、もてなしや祝いと感謝の証しであり、素材の60%以上が「紙」である。日本には自然の素材でものを包み、使用後は大地に返すという知恵があり、生活に対する愛情があった。

パッケージは「包み」と「装い」であり、商品の顔をつくり、価値を高めて伝える。道具としてのパッケージデザインの役割とは、「包む」「くるむ」「保つ」「纏う」「装う」「魅せる」「封じる」「くるむ」「運ぶ」「再生する」「リフィール」「ユニバーサルデザイン」であり、商品戦略の重要な武器となる。

私が務めていたデザイン会社「GK インダストリアル デザイン 研究所」の榮久庵憲司先生が1961年にデザインを手がけた「キッコマンの醤油卓上ビン」は日本のシンボルであり、50年来生き延びるベストセラーとなった。コカ・コーラ瓶に匹敵す



る世界の代表的な容器のひとつとして、暮らしの隅々にまで行き渡っている。長生きの基本はやはり卓上瓶の機能である。置いて安定し、持ちやすく、適量をさすことができ、さし終わりの切れが良いが、もうひとつの大切な要素は、飽きない品性である。

万上焼酎「トライアングル」(1983年)は、若い女性を購買層に取り込もうと企画された。商品名は「私」と「誰か」がお酒をメディアにコミュニケーションするという意味をもつ。ボトルの形状は、男性が知的な紳士に見える「タキシード姿」をモチーフとしているが、それは若い女性にとって不思議な魅力をもつ姿なのである。

他方、「駒子」(1985年)のパッケージデザインは、焼酎に起死回生をもたらした。瓶の曲線美は、竹久夢二が描く女性像のように滑らかで、清流のイメージを喚起する。瓶の表面に施されたフロスト加工は、美しい谷川の水煙にも似て、淡い透明感をつくり出す。流れるような草書体で書かれた「駒子」というネーミングが、優しく官能に語りかけ、それまで焼酎に押されていた悪い烙印は、このパッケージによって見事に打ち破られた。

デザインは、機能性と感性の統合、用と美の調和によって、暮らしの中へ楽しみや知恵を創出し、新しい家庭や生活風景を形成する。人それぞれの感性を大切にすることは、わたしたちの周りを取り巻く様々な「モノ」の美しさを育むことと同じであり、その結果、美しく、楽しく、価値ある暮らしが自然に生まれる。先端技術が進んでいる今日、「技術」の人間化を図り、万人の感性が共感しうる「かたち」に置き換えることこそ、デザインに求められている課題なのである。

《藤本由紀夫氏による話題提供：要約》

1980年代半ばより、鑑賞者が「みる」だけではなく、「きく」「ふれる」「かかわる」などの体験する作品を制作しているが、大学では音楽を専攻していた。音楽の場合、作曲は楽譜で終わらず、演奏して初めて成り立つ、楽器がつけられて終わるのではなく、演奏することによって完成する。いつも「コラボレーション」であり、「かかわる」ことが重要なのである。

1993年、日本初の電子ブックをつくるプロジェクトにサウンド担当で参加した。その頃、本は電子メディアの時代であり、21世紀には紙の本が無くなると言われていた。音、映像、などが付加されるマルチメディアの夢に溢れた時代。これが本に興味をもったきっかけで、それまで、本とは紙を綴じた冊子本のことだと考えていたが、実は、冊子本の歴史は1000年もない。それ以前にも、とてつもなく多くの「本」があったことに注目した。

また、本の場合、必ず読書という行為が伴われる。本が置いてあるだけでは完結しない。読むという行為がとても大事で、読書は音楽の演奏にあたる。読書自体も、読書する人の技術、知識、好奇心で変わる。同じ本でも読み手の能力や興味で変わるということが面白い。

このような経緯から、読書をテーマとした展覧会「四次元の読書」を2001年に開催した。展示空間全体を「一冊の本」として、紙だけではなく、音が出る作品、マルチメディア、活字、マルセル・デュシャンの講演テキストとデュシャン本人の朗読に伴奏を加えた作品などを展示し、観客自らが読み解いていく。例えば、『不思議の国

のアリス』の一節「Eat me」のテキストを分解し、アルファベット型の Pasta にして瓶に入れた作品がある。文字は見るだけではなく、この Pasta を茹でて食べれば文章を読書したことになる。展覧会に訪れ、「これは何だろう」と考えながら作品を体験していくことは、アーティストと鑑賞者とのコラボレーションとなる。



本は、読むだけではなく、素材や空間としても考えることができる。ここで提言として、洞窟壁画を考えてみたい。フランスとスペインの国境にある山で発見された洞窟壁画は1万年千年前のものだが、当時の人はこの絵を見るができない。この絵は洞窟のいちばん奥の真っ暗な壁に描かれているからだ。また、1990年代には、3万年以上も前のものとされる洞窟壁画が見つかった。狩りのための祭儀の絵だと言われていたが、描かれた動物は、その辺りに生息しない。僅かな灯りをもって洞窟に入ると、自然の造形物が目に飛び込んでくる。洞窟の中は湿度90%で酸欠状態。死を覚悟しなければ洞窟の中へは入れないだろう。そこで3万年前の人たちは何を見ていたのだろうか。600メートルほどの長さがある洞窟の入口から奥までを「一冊の書物」と考えてみたい。読者は小さな灯りをもって、順番に奥へと進んでいく。絵が奥にしか描かれていないのは、明らかに意図的である。灯りがつくるさまざまな影は情景をつくる。影なのか絵なのか、実際にあるものなのか、区別できない状況。最近の発見では、具体的な描画だけではなく、抽象的なイメージも多く確認されている。人の移動や光の当たり方で絵は変化するように見える。動物の絵の付近で発見された手の型が何を意味するのか、といった問題にも興味は尽きない。まさに、本そのものである。

人間が何かを見たい、知りたい、驚きたいという好奇心は、3万年前も現代も変わらない。そのための材料が、紙の本か液晶の画面かの違いである。意図的に表現した人、その中に入って冒険しながら見た人、両者の存在を考えると、本を考えるうえで重要。洞窟に文字は書かれていない。本はもともと「絵」でつくられていて、文字はあとからつくられたのに、なぜ「絵本」というのだろうか。これからの電子出版の時代でも、このことから考え始めると面白い。

二人の話題提供者からの示唆深い発言を受け、会場からも「モノとしての本に精神的な要素も含んで考えると広がりがある」「絵本は建築物であると語るクヴィエタ・パツォウスカーの作品にヒントがある」「今日の分科会は精神と一体になった器として本を捉える出発点となった」といった意見があり、短時間ではあったが、充実した分科会となった。(佐藤博一)

絵本学会 16 回定期総会

日時: 2013年6月15日(土) 18:00~ 18:30

会場: 静岡文化芸術大学(静岡県 浜松市)

議長: 香曾我部秀幸 書記: 今田由香

出席者数: 52名、委任状提出者数 95名

1. 開会の辞

石井光恵事務局長より開会の辞が述べられた。

2. 議長・書記選出

議長に香曾我部秀幸氏、書記に今田由香氏が選出された。

3. 会長挨拶

松本猛会長より、第16回定期総会開催にあたり、挨拶が述べられた。

4. 2012年度活動報告

石井光恵事務局長より、資料に基づき、下記のような2012年度活動報告がなされ、承認された。また、会員からの質問を受け、現在の会員数は個人会員463名(学生会員含む) 賛助会員12団体であることが伝えられた。

◆絵本学会 2012年度活動報告

◎第15回絵本学会大会の開催

2012年6月2日(土)、3日(日) 熊本県山鹿市「八千代座」

テーマ:「絵本からはじまる 絵本からつながる」

参加者 両日参加 333名 1日参加 644名 計 977名 (内会員 95名、大学生以下 118名)

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラムの開催 2012年12月22日(土) 日本女子大学

テーマ:「スズキコージ解体! スズキコージ×松本猛×??」

参加者 117名

◎紀要委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第15号の刊行

・2012年度絵本参考文献目録(2012年1月~2012年12月)

の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本BOOK END 2012』の刊行

◎研究委員会の活動

・研究会の開催 2012年11月17日(土) 武蔵野美術大学

テーマ:「絵本におけるブックデザイン」 参加者 60名 (内会員 10名)

・絵本研究助成(2件、各3万円)

「戦後絵本史における「こぐま社」絵本研究」(代表:廣田真智子)

「イラストレーションと翻訳文体—ヨーロッパ伝承文学の絵本化及び絵本と翻訳の研究」(代表:藤本朝巳)

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の発行 45号(5月)、46号(10月)、47号(2月)

・HPの管理運営

◎他学会等との連携

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学会、日本マンガ学会等との連携推進

絵本学会事務局の移転

梅花女子大学(香曾我部秀幸事務局長)より、日本女子大学(石井光恵事務局長)へ、学会事務局を移転。

◎入退会

新入会者 34名 退会者 33名(除籍者を含む) 賛助会員 1名

5. 2012年度決算・会計監査報告

石井光恵事務局長より、資料「2012年度収支決算案」にもとづき、会計報告がなされた。予算より支出額が少なかった消耗品費については、事務局運営に使用する機器の購入を見直した為であること、予算より支出額が多かった旅費交通費については、新理事会の発足に伴い、理事会を予定の5回よりも1回多く開催した為であるとの説明がなされた。また、「BOOKEND2011」の売上金の支払いが、2013年4月以降となったため、未収金として計上したことが伝えられた。

以上について、監査担当の佐々木宏子氏より、監査の結果適正と認めると伝えられた。審議の結果、2012年度決算報告が承認された。

6. 2013年度活動計画について

松本猛会長より、資料に基づき2013年度活動計画について以下の説明がなされ、承認された。

◆絵本学会 2013年度活動計画

◎第15回絵本学会大会の開催

2013年6月15日(土)、16日(日) 静岡文化芸術大学(静岡県浜松市)

テーマ:「え?ほん!?—あれも絵本 これも絵本—」

◎企画委員会の活動

・絵本フォーラムの開催

◎紀要編集委員会の活動

・絵本学会研究紀要『絵本学』第16号の刊行

・2013年度絵本参考文献目録(2013年1月~2013年12月)の作成

◎機関誌編集委員会の活動

・機関誌『絵本BOOK END 2013』の発行準備

◎研究委員会の活動

・研究会の開催

・研究講座の開催

・絵本研究助成(3件、各5万円)

◎広報委員会の活動

・『絵本学会NEWS』の発行(年3回の予定)

・HPの管理運営

◎他学会等との連携

子どもの本WAVE、JBBY、日本児童文学学会、日本イギリス児童文学学会、日本マンガ学会等との連携推進

会員名簿の発行

入会案内ちらしの作成

その他

7. 2013年度予算案について

石井光恵事務局長より、資料「2013年度決算案」にもとづき、予算案が示された。特に、2012年度との大きな違いについて下記の説明がなされた。

- 1) 学会活動のさらなる充実と規模の拡大を目指し、事業費活動収入より支出が多い予算案を作成した。不足分については、現在、事業規模に対して繰越金が多くあるので、それを活用する。
- 2) 2013年度は会員名簿改訂年である為、事業支出、印刷製本費支出に会員名簿制作費を計上した。
- 3) 広告費支出に、入会案内チラシの印刷代を含め、50,000円を追加した。
- 4) 活動費支出のうち、企画委員会活動費は、活動規模の拡大に合わせて50,000を増額し、研究助成金と助成件数を見直したため研究助成費支出を150,000に増額とした。

以上について審議し、予算案は原案通り承認された。

8. 質疑応答

会員から下記の提議があった。

- 1) 会員より、絵本作家についての一次資料が少ないという問題が指摘された。また、美術館や画廊等で開催される絵本の原画展や絵本作家の講演会に会員が出向くこと、またそれらを絵本学会として記録・公表していくことが、今後の絵本研究に必要であるとの意見が出された。これに対し、松本会長ならびに総会出席者は、学会として展覧会の情報をより細かく、また適時に発信する必要があることを確認した。また、竹迫裕子監事より、「BOOKEND」には、毎号、絵本原画展についての記事を掲載し、記録を残しているが、公式サイト等を活用した即時応答的な情報発信システムの構築が望まれるとの意見が出された。これらを受け、今井良朗広報委員長より、公式サイトとの運営と活用については、運営の外部委託も含め、理事会と広報委員会で検討中であることが報告された。
- 2) 佐々木宏子監事より、絵本学会の日本学術会議協力学術研究団体への登録が提議され、理事会で検討していくこととなった。

9. 閉会の辞

石井光恵事務局長より閉会の辞が述べられた。

絵本学会 2012年度収支決算

					2012年4月1日～2013年3月
科目	予算額	決算額	増減(予-決)	備考	
I 事業活動収支の部					
1. 事業活動収入					
①受取会費収入	3,700,000	3,779,000	-79,000		
賛助会員	300,000	260,000	40,000	20,000×13口(現在12団体)	
正会員	3,360,000	3,511,000	-151,000	8,000÷438+7,000	
準会員	40,000	8,000	32,000	2,000×4名	
②事業収入	210,000	356,770	-146,770		
研究活動事業収入	60,000	110,170	-50,170		
フォーラム収入	30,000	110,170	-80,170	入場者収入・書籍等売上	
研究講座収入	30,000	0	30,000	参加費収入	
出版事業収入	150,000	246,600	-96,600	『絵本 BOOK END 2011』等	
③雑収入	130,200	151,789	-21,589		
受取利息収入	200	89	111		
入会金収入	80,000	66,000	14,000	入会金 2,000×33名	
雑収入	50,000	85,700	-35,700	出版物在庫販売等	
事業活動収入合計	4,040,200	4,287,559	-247,359		
2. 事業活動支出					
①事業費支出	1,985,000	1,885,829	99,171		
人件費支出	300,000	300,000	0		
事務局報酬支出	300,000	300,000	0	事務局賃金等	
事業費支出	1,685,000	1,585,829	99,171		
消耗品費支出	100,000	45,738	54,262	事務消耗品費	
印刷製本費支出	760,000	794,090	-34,090		
絵本学会ニュース	250,000	198,400	51,600	45,46,47号	
研究紀要	430,000	512,190	-82,190	『絵本学』14号	
会員名簿	20,000	0	20,000	新入会追加分	
その他	60,000	83,500	-23,500	封筒等	
通信運搬費支出	250,000	221,831	28,169	ニュース等発送費・通信費	
旅費交通費支出	400,000	429,020	-29,020	理事旅費等(理事会6回/年)	
会議費支出	10,000	0	10,000		
広告費支出	100,000	30,000	70,000		
印刷物制作費支出	20,000	0	20,000		
HP更新作業費支出	80,000	30,000	50,000		
振込手数料	15,000	9,410	5,590		
雑支出	50,000	55,740	-5,740	事務局移転に伴う経費分含む	

②活動費支出	820,000	789,754	30,246	
大会運営補助金支出	300,000	300,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	460,000	429,754	30,246	
企画委員会	150,000	257,501	-107,501	フォーラム等
紀要編集委員会	50,000	15,087	34,913	紀要編集等
機関誌編集委員会	60,000	60,000	0	『絵本 BOOK END』編集
研究委員会	100,000	82,166	17,834	研究会主催
広報委員会	100,000	15,000	85,000	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	60,000	60,000	0	3万円×2団体
20周年事業支出	0	0	0	
③出版事業支出	1,200,000	1,183,140	16,860	『絵本 BOOK END 2012』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,200,000	1,183,140	16,860	
事業活動支出合計	4,005,000	3,858,723	146,277	
事業活動収支差額	35,200	428,836	-393,636	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
10周年事業資産金取崩収入	0	0	0	
投資活動収入計	0	0	0	
2. 投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
III 財務活動の部				
1. 財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
	200,000	0	0	
当期収支差額	-164,800	428,836	-593,636	
前期繰越収支差額	4,501,487	4,501,487	0	
次期繰越収支差額	4,336,687	4,930,323	-593,636	

絵本学会 2013 年度収支予算

2013年4月1日～2014年3月

科目	予算額	前年予算額	増減(予-前予)	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	3,700,000	3,700,000	0	
賛助会員	300,000	300,000	0	20,000×15口(現在12団体)
正会員	3,360,000	3,360,000	0	8,000×420名(現在約450名)
準会員	40,000	40,000	0	2,000×20名
②事業収入	260,000	210,000	50,000	
研究活動事業収入	60,000	60,000	0	
フォーラム収入	30,000	30,000	0	入場者収入
研究会収入	30,000	30,000	0	参加費収入
出版事業収入	200,000	150,000	50,000	『絵本 BOOK END 2012』
③雑収入	130,100	130,200	-100	
受取利息収入	100	200	-100	
入会金収入	80,000	80,000	0	入会金2,000×40名
雑収入	50,000	50,000	0	出版物在庫販売など
事業活動収入合計	4,090,100	4,040,200	49,900	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,102,000	1,985,000	-117,000	
人件費支出	360,000	300,000	60,000	
事務局報酬支出	360,000	300,000	60,000	事務局賃金等
事業費支出	1,742,000	1,685,000	57,000	
消耗品費支出	80,000	100,000	-20,000	事務消耗品費
印刷製本費支出	830,000	760,000	70,000	
絵本学会ニュース	250,000	250,000	0	48,49.50号
研究紀要	460,000	430,000	30,000	『絵本学』15号
会員名簿	100,000	20,000	80,000	名簿の作成
その他	20,000	60,000	-40,000	
通信運搬費支出	250,000	250,000	0	ニュース等発送費・通信費
旅費交通費支出	420,000	400,000	20,000	理事旅費等(理事会5回/年)
会議費支出	10,000	10,000	0	
広告費支出	130,000	100,000	30,000	

印刷物制作費支出	50,000	20,000	30,000	
HP更新作業費支出	80,000	80,000	0	
振込手数料	12,000	15,000	-3,000	
雑支出	10,000	50,000	-40,000	
②活動費支出	960,000	820,000	140,000	
大会運営補助金支出	300,000	300,000	0	ポスター等制作費を含む
専門委員会活動費支出	510,000	460,000	0	
企画委員会	200,000	150,000	50,000	フォーラム等
紀要編集委員会	50,000	50,000	0	紀要編集等
機関誌編集委員会	80,000	60,000	20,000	『絵本 BOOK END』編集
研究委員会	100,000	100,000	0	研究会主催
広報委員会	80,000	100,000	-20,000	『絵本学会ニュース』編集
研究助成費支出	150,000	60,000	90,000	5万円×3団体
20周年事業支出	0	0	0	
③出版事業支出	1,200,000	1,200,000	0	『絵本 BOOK END 2013』
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,200,000	1,200,000	0	
事業活動支出合計	4,262,000	4,005,000	257,000	
事業活動収支差額	-171,900	35,200	-207,100	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
投資活動収入計	0	0	0	
2. 投資活動支出				
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
III 財務活動の部				
1. 財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出	200,000	200,000	0	
当期収支差額	-371,900	-164,800	-207,100	
前期繰越収支差額	4,930,323	4,501,487	428,836	
次期繰越収支差額	4,558,423	4,336,687	221,736	

財産目録

2013年3月31日現在

科目	金額	
I 資産の部		
1. 流動資産		
現金預金		
現金手元有高	92,031	
普通預金 りそな銀行高槻支店	192,948	
普通預金 ゆうちょ銀行	1,205,842	
定額貯金 高槻天王郵便局	2,000,000	
絵本学会振替口座	1,192,902	
未収金	246,600	
次年度仮払い金(大会運営補助金)	0	
流動資産合計	4,930,323	
資産合計		4,930,323
II 負債の部		
1. 流動負債		
流動負債合計	0	
負債合計		0
正味財産		4,930,323
	次年度繰越金	4,930,323
	計	4,930,323

宮沢賢治原作絵本を考えるー『銀河鉄道の夜』を中心にー

日時: 2013年9月8日(日) 13:30~16:00

会場: 世田谷文学館 1階文学サロン

ゲスト: 金井一郎(造形作家)

松田素子(編集者)

司会: 笹本純(筑波大学教授・絵本学会研究委員会委員長)

企画: 絵本学会研究委員会(笹本純/本庄美千代/岡野恵子)

主催: 絵本学会

共催: 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館

参加者: 119名(内 学会員 10名)

2013年度の絵本研究学会は、宮沢賢治の没後 80年にあたることもあり、賢治の作品を原作とする絵本について考えることをテーマとしました。ゲストは、独特の手法で永年に渡り賢治世界を表現し続けている造形作家の金井一郎さんと、賢治原作の絵本を数多く手がける編集者の松田素子さんのお二人です。会場として「没後 80年 宮沢賢治 詩と絵の宇宙 雨ニモマケズの心 展」を開催中(2013年 7月 13日~ 9月 16日)の世田谷文学館のホールをお借りし、同展見学を兼ねた多くの方にご参加頂きました。以下、概略をご報告致します。

研究会主旨・ゲストの紹介

まず司会者より、開催中の宮沢賢治展と重ね合わせて賢治作品を原作とする絵本について考えるという本日の主旨が伝えられました。また、全体を2部構成とし、第1部では、造形作家金井さんから「銀河鉄道の夜」に基づく「驕り絵」の制作およびその絵本化についてご紹介頂き、第2部では、編集者松田さんから、賢治原作絵本を多く手掛けた体験を踏まえたお話を頂戴する、との進行予定が示されました。

ついで、両ゲストの紹介がありました。金井さんは、ご自身が生み出された「驕り絵」の手法で、賢治を代表する「銀河鉄道の夜」の世界を 50年近くに渡って表現し続けられていること、「光の造形である驕り絵は、写真や印刷の複製では伝わらない。ライブで直接触れて頂きたい」という思いでいたけれど、今回、松田さんの熱心な勧めにより初めて絵本の刊行に導かれたこと、等々、紹介されました。松田さんは、「300冊以上の絵本出版を手掛けられ、賢治絵本も数多く作られている、賢治が大好きな方です」との紹介を受け、ご自身からも「使えない大学生だった自分に先輩から差し出された本が賢治の本で、大きな影響を受けました。賢治への恩返しのためで編集しています。」と発言されました。

第1部 金井一郎さんの「驕り絵」および「銀河鉄道の夜」の絵本化

◎驕り絵の技法について

まず、数点の驕り絵作品が示された後、その制作過程を伝える記録映像が上映されました。金井さんの説明コメントなど聞きながら、この技法の成り立ちを学びました。まずライトテーブル上に黒い紙を乗せ、木綿針で小さな穴を開けます。そうして出来る無数の星粒の様な点描により画像を表現します。黒紙のシートは、1点の

絵につき2枚作られます。その2枚を微妙に間隔調整しつつ重ね、さらにその上に、半透明スクリーンをやはり隙間を空けて乗せ、都合3層からなるパネルを作ります。後ろから光をあて、正面から見ると、スクリーン上に光の粒で描かれた絵が映し出されるという仕組みです。

金井さんは、小学校 4年生の時に「銀河鉄道の夜」と出会い、そのビジュアル化に挑み始めたそうです。後に、日食の時に見た木漏れ日が地面に映る様子がヒントになって、20代で驕り絵という手法をみ出したとのことでした。

◎絵本「銀河鉄道の夜」掲載の驕り絵の紹介

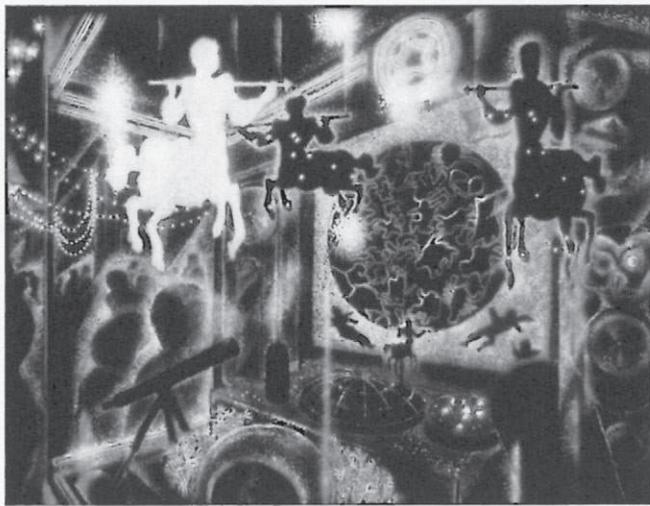
金井さんの驕り絵による絵本「銀河鉄道の夜」が、三起商行(ミキハウス)より刊行予定(2013年 10月)で、その編集に携わったのが松田さんとの説明があり、同絵本に掲載される驕り絵が、順次プロジェクターで上映紹介されました。50点余の驕り絵は、詩情豊かな魅力に溢れたものでした。

◎驕り絵の絵本化の経緯

松田さんから、驕り絵による「銀河鉄道の夜」の絵本作りの経緯について、以下の様なお話を頂きました。

「20年程前、金井さんの展覧会を初めて見て、光の粒の表現に宇宙空間を感じ、魅了されました。その時「私がいつかきつと絵本にします!」という言葉が口をつけて出てしまった。ようやくその約束が果たせました。」

「文章の長さ、最終的な本の価格など、せめぎ合の末、結局 112 頁で作る事になりました。文と絵の構成は松田が行い、10点ほど新たな絵を制作していただきました。新作以外の絵については金井さんご自身が撮影されたポジがありました。長年に渡って撮影された写真ですので色味にバラつきがありましたが、それはあえてそのまま生かしました。金井さんの作品はモノトーンですが、賢治作品を読んでいると、色が意味をもって使われていると思える描写がしばしばあります。例えば、誰かが去ったり消えたりする場面では赤い色が使われることがある。カムパネルラが消える直前に描写される電信柱の赤い腕木もその一例です。音源が遠ざかると音が低くなるドップラー効果が光にもあり、遠ざかる天体などは赤く見えます。





賢治には科学の知識がありましたので、この赤も意図的に書いたのではないかと思います。金井さんもそれに応えて、今回の絵本の裏表紙で、去っていく列車の尾灯のところに赤を入れておられます」

◎「植物ランプ」について

第1部の締めくくりとして、金井さんのもう一つのお仕事である「植物ランプ」が紹介されました。様々な植物の実などの中身を特殊な仕方です抜き取り、表皮を残して乾燥させ、その中にLED電球を仕込んだ小さな灯りの作品です。今回は、烏瓜の実のものとしてリンゴを使ったものを見せてもらいました。写真集などの回覧で事前に知らされてはいましたが、暗くした会場であらためて点灯された可愛いランプは、息をのむ美しさでした。「烏瓜の灯り」は、「銀河鉄道の夜」中に出て来るもので、それを踏まえたものとのことでした。

第2部 賢治作品を原作とする絵本の特質と意義

沢山の賢治原作絵本の出版編集に携わって来られた松田素子さんより、ご自身の豊かな経験を踏まえたお話がありました。以下、概略ですが、宮澤賢治へのオマージュを込めた松田さんのお話です。

◎賢治作品の受止め方

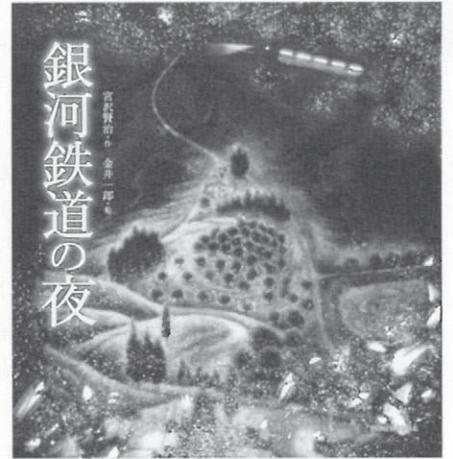
「賢治は大きな存在で、崇める方々も多く、『絵本にしてイメージを固定するのは、よくないのではないか』という意見もあります。そういう意見を聞く時に、私にはいつも思い出す言葉があります。それは、賢治が生前に出版した童話集『注文の多い料理店』の「序」の文の中にあるものです。『わたくしはこれらのちいさなものがたりの幾きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることをどんなにねがうかわかりません』というものです。

この言葉にあるとおり、賢治は、自分の書いたものが、読んでくれた人の心の糧、すなわち「ほんとうのたべもの」になる事を願っていました。私はこの「序」の言葉を読むたびに胸が熱くなります。ですから私たちは、賢治を「食べましょう」。それはもう、自由に食べていいのだと思います。皆さん一人一人違います。絵描きさんも一人一人違います。色々な価値観をもち、色々な経験のうえで、あるとき賢治と出会い、その作品を読み食べ、自分なりに消化し、そしてそれぞれに自身のエネルギーにする……それでいいと思うのです。」

◎絵本作りにおける画家と編集者の関係

「制作過程について事例を挙げてお話しします。例えば『なめとこ山の熊』の画家あべ弘士さんの場合。最初のラフでは原文通りに、血の滴る熊の解体だった絵が、最終的には、オオコノハズクという鳥がその足にがっしりと鼠を捕らえた姿が前面に大きく描かれ、解体

のシーンはなくなりました。これは決して逃。むしろ“生き物は、他の命を喰らって生きるのだ”という、その否も応もない事実を強烈に照らし出し、賢治が作品の奥底に秘めたことを汲み取り、昇華させた絵だと私は思います。」



「『月夜のでんしんばしら』の竹内通雅さんは、電気がつく喜びを表すために主人公を空に飛ばせようとし、『蛙のゴム靴』の松成真理子さんは人間の靴をカエル用に作り変える過程まで描きました。実際にはその絵は使いませんでしたが、そんな画家たちの読みの深さやすさまじい回り道に私は舌をまきました。」

「『やまなし』の川上和生さんはサワガニの腹側を観察するためにサワガニを飼いました。必要とあらば編集者も色々な実物や資料を探します。『水仙月の四日』の黒井健さんには「やどりぎ」を、『度十公園林』の伊藤秀男さんには、最後に石碑になる「橄欖(カンラン)岩」を渡しました。画家の求めに応じて様々なことも調べます。実物や事実は、画家が確信をもって絵筆を動かすためにとても必要なのだと痛感しています。」

「賢治の弟の宮澤清六さんにお会いしたことがあるのですが、吹雪の中『風の又三郎の碑を見てくるように』と言われ、腰までの雪の中を歩き、汗だけで帰ってきた私に、清六さんは『実際に雪の中を歩いて欲しかった』と微笑みながら言われました。賢治も自然を真摯にみつめて作品を書いています。私も画家と共に、賢治に謙虚に真摯に向き合う姿勢を持ち続けたいと思っています。」

会場からの声・まとめ

会場にいらっしやった赤羽茂乃さん(赤羽末吉を義父とする方)から、「義父は、賢治の世界を体感しようと吹雪の山に登り、その時の感覚を基に『水仙月の四日』を描きあげました。難題だがぜひとも挑戦したい、それが義父にとっての賢治作品でした。」というお話をお聞きすることができました。

最後に司会者より「賢治のテキストは、人や事物についての具体的な描写は少ないが、比喩やオノマトペに富む独自の文章であり、物事の経緯や人の心の様相がありありと描写され、読者のイメージを誘発する強烈な力を持つ。それが多くの絵本やマンガや映像などとなって現れる。そういうことの蓄積を通じて、賢治の仕事は、単なる文学作品を超え、皆に共有される作物となっているのではないか。」とまとめが述べられ、閉会となりました。

後日、松田さん宛に、当日参加した児童から、絵本作りに感動したという手紙と銀河鉄道の絵とが届きました。この催し自体が、ささやかながら透き通ったほんとうの食べ物となったのではないのでしょうか。(報告 岡野恵子)

研究紀要委員会からのお知らせ

2013年度研究助成金再募集について

前号学会ニュースにて、2013年度研究助成金の申請を募集しましたが、応募が1件もありませんでした。次の要領で再募集を行いますので、奮ってご応募下さい。

この助成は、絵本に関する研究会などグループによる活動に対し、研究助成金を支給するものです。助成金額は1件あたり50,000円、3件以内について助成します。助成は「研究活動」に対するものですが、純然たる学術研究だけに限らず、各種の実践的活動や資料の収集整理、現地調査など、「絵本学」に資すると認められる様々な活動について対象とします。

応募申請は、絵本学会会員に限って認めます。助成を希望する場合は、次の事項を明記した申請書を作成し、2013年12月10日(火)までに(必着) 絵本学会事務局宛に郵送して下さい。

- ・ 研究、活動のテーマ、目的、概要など
- ・ 代表者及び構成員の氏名(学会員、非会員の別を明記)
- ・ 成果の発表、公開の予定

全ての応募を対象に、研究委員会で速やかに審査・選考します。結果は、理事会の承認を得た上で、応募者にお知らせします。

企画委員会からのお知らせ

絵本学会 企画委員会主催 絵本フォーラム 2013

片山 健

「私のおなかの中の小さな人 あるいはマグレ様の思し召し」

絵本作家の片山健さんをお招きして、2013年度絵本フォーラムを開催することになりました。片山健さんのおなかの中には小さな人が住んでいるようです。その人について、絵本作りについて、たぶん、その他のあれこれについても、話していただきます。東京でご講演をなさるのは久しぶりのこと。参加者からの質問にも答えてくださる予定です。貴重な機会ですので、ふるってご参加ください。

【名称】 絵本フォーラム 2013「片山健 私のおなかの中の小さな人 あるいは マグレ様の思し召し」

【日時】 2013年12月14日(土) 14:00～16:00

【場所】 日本女子大学・目白キャンパス(文京区目白台2-8-1) 百年館2階・百206教室(予定)

東京メトロ副都心線・雑司ヶ谷駅3番出口を出て目白通りを左手(江戸川橋方向)に進み、徒歩8分・JR目白駅前から都営バス(新宿西口駅行か椿山荘行)に乗り5分、「日本女子大学前」で下車

【ゲスト】 片山健さん

【参加費】 会員 / 無料 一般 / 1,000円 学生 / 500円

【定員】 80名(先着順)

【申込み方法】 往復葉書かメールで、12月7日(土)までにお申込みください。

往復葉書 往信面に①から⑥を、返信面に氏名と住所を記入し、絵本学会企画委員会宛にお送りください。

e-mail: タイトルに「絵本フォーラム」、本文に①から⑥を書いて、絵本学会企画委員会宛(aspbforum1234@gmail.com) にメールをお送りください。3日以内に返信いたします。

①名前 ②所属もしくは職業(学生は大学名と学年) ③住所 ④メールアドレスか電話番号 ⑤片山健さんに聞いてみたいこと
申し込み・問い合わせ先

〒112-8681 文京区目白台2-8-1 日本女子大学児童学科 絵本学会事務局

企画委員・今田(aspbforum1234@gmail.com)

事務局からのお知らせ

2013年度 第2回 絵本学会理事会 議事録

日時: 2013年6月15日(土) 10:00-11:50

会場: 静岡文化芸術大学 南棟 3階

出席者: 松本猛、石井光恵、今井良朗、今田由香、香曾我部秀幸、笹本純、佐藤博一、武田美穂、藤本朝巳、本庄美千代、甲斐聖子(第2回理事会のみ記録係として出席)

○報告事項

1. 第16回絵本学会大会(2013年度)について
第13回大会の大会実行委員の林左和子氏より、参加申し込み状況など今大会に関する伝達がなされた。

参加申し込み状況: 会員 113名 一般 40名 会場などの担当者: 林左和子氏、林容子氏

今大会の広報に関して新聞各紙に掲載願を出しているが、日程が知事選と重なっているとのことであった。

2. 会長挨拶

第2回理事会開催の挨拶があった。

3. 前回第1回絵本学会理事会議事録の確認

第1回絵本学会理事会議事録が確認され、了承された。

4. 事務局

・名簿作成の進捗状況

名簿作成の進捗状況について現段階で訂正が終わっていることが伝えられた。また、新しく名簿を作成するにあたり、規約のページの確認がなされ、準会員の年会費が4000円から2000円に変わった点に関して、変更となった年の総会日の日付で記載することが了承された。また、その他に変更となった点があれば、事務局まで伝えることとなった。今後、印刷を経て8月中旬にBOOKENDと共に送付することとなった。

・監査報告について

監事より、「監査の結果適正であった」との報告があった。
また、以下の点に関して、コメントがあったことが併せて伝えられ、それぞれについて確認がなされた。

①理事の交通費の領収書は、公的機関より発行されるものが望ましい。

②各委員会などでの会合では、飲食費は会合費に含めないことが望ましい。

会合場所確保などの観点から、常識の範囲内であれば飲食を伴う打ち合わせも、やむを得ない場合があることが話し合われた。

③第15回絵本学会大会会計報告について

理事会としては、会員からの会費から捻出する30万円の大会運営補助費用が、適切に使われているかどうか責任があると考えており、今大会より大会の会計とは別に、大会運営補助費を分けて会計報告を作成するように、実行委員会に伝えることになった。

・入会案内チラシの作成について

今年度、入会案内チラシを武田美穂理事のイラストをいれ、作成したことが報告され、配布された。

・名義後援について

以下4件の名義後援を行った旨、報告された。

①世田谷文学館「没後80年宮沢賢治・詩と絵の宇宙一雨二ノマケズの心」

②静岡文化芸術大学「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2013」

③ちひろ美術館「色の音 紙の詩 クヴィエタ・パツォウスカー展」

④軽井沢絵本の森美術館「体感！空間えほん美術 ～童心をよびさます絵本芸術～」

5. 各委員会報告

1) 企画委員会

2012年度フォーラムの報告に関して、第1部は次回のNEWSで、第2部はBOOKENDで取り上げることが伝えられた。

2) 紀要編集委員会

「絵本学」第15号の刊行に際し、今号よりカラーページが登場したことが伝えられた。

来年度の執筆者にも、希望者には自己負担で案内することとなった。

3) 機関誌編集委員会

「BOOKEND2013」の進捗状況が報告され、8月中旬に刊行予定であることが伝えられた。

また、BOOKENDの製作を依頼している朔北社より、未収金となっている246,600円について

相談があったことが藤本理事より伝えられた。「BOOKEND2013」制作時に、清算することが確認された。

4) 研究委員会

9月8日(日)に松田素子、金井一郎氏と世田谷文学館で宮沢賢治の研究会を開催する旨が、伝えられた。完成したチラシを「BOOKEND2013」の発送時に同封して、会員に知らせることとなった。

5) 広報委員会

次回絵本学会 NEWSの発行を9月に予定していることが報告された。

6. 絵本学会への寄贈本について

北野佐久子氏「ピアトリクス・ポターを訪ねるイギリス湖水地方の旅」大修館書店

千田篤氏「ラフカディオ・ハーンの英語教育」弦書房

○審議事項

1. 入退会者について

下記入退会者が報告され、承認された。(敬称略) また、退会を希望していた内田麟太郎氏より退会取り消しの意向が伝えられ、了承された。

・入会者 25名

古川智恵、濱野恵子、末次絵里子、宮本淳子、パクミギョン、橋爪千恵子、岡崎有里、仲明子、

万谷亮子、篠田悦和、大原かおり、山本美希、梶原康子、山口恵子、宮本桃英、佐藤愛子、手良村昭子、佐井国夫、綾野鈴子、中村泰子、森谷恭子、権藤桂子、坂部豪、平野雅彦、村上淳子

・退会者 7名

春日和香子、上岡秀拓、仲田公彦、久保昌子、大橋良子、横田香野子、島田美織

・除籍者 13名(4月1日～6月3日までの退会者の措置について)

大樫麻衣、岡尚子、岡田初美、加藤道子、倉持佳代子、桜井国芳、谷内美郷、想厨子伸子、中村泰久、

橋本永子、蜂須弘子、矢浦有理江、住本和佐

2. 第16回絵本学会大会定期総会議案について

第16回絵本学会大会総会議案について、石井事務局長が総会資料に基づき説明を行った。

2012年度活動報告案、2012年度決算案、2013年度活動計画案に関して話し合われた結果、了承された。2013年度予算案に関しては、一部以下の通り、総会時に訂正が加えられることとなった。訂正箇所：Ⅱ投資活動収支の部項目の1. 投資活動収入の「10周年事業資産金取崩収入」を削除する。

3. 20周年記念事業について

20周年記念事業にあたり、具体的な、絵本学会賞の検討などは次回の理事会で引き続き話し合われることが確認された。

4. 入会時期と年会費について

入会の時期が、その年度の残り5カ月未満の場合、年会費を半額にするかどうか次回理事会で継続審議することとなった。

5. 次回理事会開催日程について

次回理事会は、2013年9月21日(14:00～)日本女子大学で開催されることとなった。

お知らせ

『絵本で読みとく宮沢賢治』（水声社）出版のお知らせ 中川素子／大島丈志編

宮沢賢治童話は、多くの絵本化がなされている。

今年は宮沢賢治没後80周年であり、賢治童話に興味をもつ人がふえているように思う。絵本を中心とした「宮沢賢治・詩と絵の宇宙 雨二モマケズの心」展も全国巡回中である。賢治童話を絵本で読みとくことにより、新しい賢治像もみつかるとは、出版にいたった。

『絵本で読みとく宮沢賢治』は編者2人のみでなく、執筆者の多くと装丁者が絵本学会会員である。

目次を見ていただければおわかりのように、読みとく視点も多領域にわたっていて、膨らみのある賢治像ができたのではと自負している。会員たちの研究の試みとして、御高覧いただければと思う。

目次は以下のとおりである。

まえがき 中川素子

1

すきとおったほんとうのたべもの——宮沢賢治絵本シリーズを編集して 松田素子

宮沢賢治童話にみる夜の光と色の視覚化 久保村里正

抽象美術家による宮沢賢治童話の絵本化 中川素子

「雪わたり」からみる国語教育と賢治絵本 山本純子

いわさきちひろのなかに息づく宮沢賢治 上島史子

2

イメージの選択「銀河鉄道の夜」の場合 今田由香

絵本『気のいい火山弾』を考える 鈴木健司

小林敏也と「画本 宮沢賢治」——「画本 雨二モマケズ」を中心に
笹本純

「注文の多い料理店」の絵本化に関する三つの考察——不確定箇所
の再創造を中心として 大島丈志

片山健と『狼森と笹森、盗森』——ミステリアスな符号の交錯する
なかで 石井光恵

小林敏也「ポラーノの広場」を謎解きする 赤田秀子

賢治童話の絵本化 「虔十公園林」を中心に 関口安義

「グスコブドリの伝記」との「出会い」に絵本はどう関われるのか？

近藤研至

3

「銀河鉄道の夜」の映像化——解釈の諸問題について 加倉井厚夫
文字の絵本 風の又三郎 和田直人

ワークショップで表現する宮沢賢治の世界 齋藤正人

絵で表現することからはじめる「風の又三郎」の楽しみ方 清水早
知子

4

「宮沢賢治絵本リスト」とその作成 藤倉恵一

あとがき 大島丈志

◎絵本関係展覧会・イベント情報

アートが絵本と出会うとき

—美術のパイオニアたちの試み

Avant-garde and Children: Artists' trail in picture books

うらわ美術館では、以下のとおり展覧会を予定しています。

開催趣旨

前衛的・実験的な美術作品と子どもの絵本。このふたつは一見無関係で、遠いものに思えます。しかし、時代の先端で新しい表現を試み、開拓した美術家たちの中には、子どものための絵本を描き、そこでも実験精神を発揮した美術家がありました。例えば、新しい芸術と社会を目指して子どもたちへ語りかけたエル・リシツキーらロシア・アヴァンギャルドの画家たち、子どものための出版社を構想したクルト・シュヴィッターズ。前衛美術運動をおこし、かつ湧き出るように子どもの絵を描いた村山知義や柳瀬正夢、抽象表現を絵本に美しく取り入れた恩地孝四郎や、幻想的な童画を描いた古賀春江。そして、子どもの自由な感覚や独創性に共鳴した吉原治良や元永定正ら具体美術協会の画家たち、さらに表現のひとつとして絵本という媒体に取り組んだ高松次郎や大竹伸朗ら現代の美術家たちです。

彼らの絵本には、通常とは異なる斬新で生々しい表現が見られます。また、彼らの作品には、常に新鮮に世界を捉え、常識や既成概念にとらわれない子供に近い感覚も感じられます。それは美術の実験精神に通じるとも言えるでしょう。本展では、実験的な美術作品と子どもの絵本の近接点を探りつつ、絵本、絵本原画や下絵、絵画や立体作品、ポスターや版画、映像など、多彩な作品、約300点をご紹介します。

内容と構成

- ・リシツキー、ロトチェンコ、ロシア・アヴァンギャルドの美術家たち／子どもに伝える—単純な色と形
- ・シュヴィッターズ 他／自由への解放
- ・村山知義、柳瀬正夢／最新動向の表出、表現の発露
- ・恩地孝四郎／抽象と子どもの本
- ・古賀春江／童画的世界と幻想
- ・吉原治良と元永定正、具体美術協会の美術家たち／自由と独創
- ・池田龍雄、山下菊二、李禹煥、高松次郎、中西夏之、柏原えつとむ(槇ひろし)、大竹伸朗 他／現代美術家と絵本、表現の広がり

会期：2013年11月16日(土)～2014年1月19日(日)

休館日：月曜日(但し12月23日および2014年1月13日の月曜日は開館)、12月24日、12月27日～2014年1月4日、14日
開館時間：午前10時～午後5時、土曜日・日曜日のみ～午後8時(入場は閉館30分前まで)

会場：うらわ美術館 ギャラリーABC

さいたま市浦和区仲町2-5-1 浦和センチュリーシティ3F

関連事業：ギャラリー・トークの日程、内容は下記HPで案内
urawa-art-museum@city.saitama.lg.jp